
Word of “ X ” ~ We have no wings ~

岳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Word of “X” ~ We have no wings ~

【Nコード】

N5202X

【作者名】

岳

【あらすじ】

これは、とある少年の軌跡である。

精霊に見捨てられたと噂される少年、ジュード・マティス。

彼は、大きく欠けていた。歪まされていた。

だけど、無様にも走り続ける。ただ、忘れた夢の残滓を追うために。

自らの支えを探すために。

これは、人の心が交差することで浮かび上がる。

ひとつの『If』から始まる、どこにでもあるストーリー。

叶わない、物語である。

プロローグ

多くを望んだことはない。僕はただ、普通の夢を持っていて、それを叶えたかった。

そして、他の人と同じように生きていたかった。

特別ななんて望んじやない。ただ、同じ空の下で、同じ者として其処に在りたかった。

このリーゼ・マクシアに広がる空の下で、両親と同じように、ただの医者として。

でもそれは叶わなかった。原因も分からず、機会だけが奪われた。

その原因を特定しようにも叶わず、ただ日々だけが過ぎていった。

ただ、心を探していただけなのに。

焦がれる程の想いを。

譲れない、信念を。

知った上で、それを持てるだけの術が欲しかっただけなのに。

ただあの日は、諦めてしまった。

でも諦めてしまった先にも、道があったて。

あの人 師匠に出会わなければ、僕はそこで死んでいたに違いない。

ここ、イル・ファンに来る前。

ハウス教授の助手になる前に聞いたあの言葉は、今もこの胸の中の奥に残っている。

僕を導いてくれた師匠。僕を初めて認めてくれた人。

実の母と同じ、いやそれ以上に尊敬している人。

「イル・ファンに行くんだってね？ そんな顔をしなさんな、アタシは止めないさ。その資格もない。」

また夢に向かって走りだすんだろ？ 止めないさ。

ただどーっただけ……アンタの師匠として言わせてもらおうかね』

拳法の師匠は。いや僕という存在、全てにおいての師匠ともいえるあの人は、僕にこう告げた。

『誰が相手であれ、何が立ちふさがっても、ぜったいに自分からイモ引くんじゃないよ。』

あんたは頑張れた。アタシのあの師匠を耐え切った。それは誇つていいことだ。

そうして頑張れるあんたは、何にだってなれる素質がある。

努力を積み重ねれば形になる才能もあるんだ。それに溺れない心も。

だからアンタ自身がそれを疑うんじゃない。決して疑うな。アンタは本当に優しい、いい子だ。

だから、信じなさい。信じていれば、道は開ける。

………医者がどうしたってんだい。アンタが胸を張って突っ走れば出来無いことはないさ！』

嬉しかった。あの言葉は、胸のなかに燦々と輝いている。

『だから笑いな。そして自分が
るように、笑って生きな』

自分が成りたい自分になれ

(絶対に忘れることはない。そう、決して
んのかジュード!「」)

「おい、聞いて

思考が声に中断される。その声を発したのは、目の前の人物
ハスキーがかった、少女の声だ。

美しい銀の髪。白が大半をしめる眼の中心は、紅蓮に染まっている。
でも、眼つきが悪い。そばかすも広がっている。一方で、髪の毛の
方は無駄に整えられている。

そばかすに関しては栄養不足と無精がたたってこうなったんだ、と
彼女ぶっきらぼうに説明していたが、それは嘘だろう。

どう考えても心因性のものである。お人好しの店長でさえ同意していた。

初めて会った時の事を思い出す。この少女、なぜか街道の真ん中で炎を纏わせた剣をぶん回していたのだ。

薄暗いイル・ファン近くの街道で突如襲ってきた火の玉群をジュードは決して忘れはしない。

だが、彼は我慢強い男である。それに少女にも悪いところばかりではない、良いところがあることを知っている。

だから黒髪の少年、ジュード・マティスは笑顔で返した。

「ぴーちくぱーちく騒ぐな色白ソバカス。たった数秒も待つことができねーのか、この銀の犬ッコロが」

童顔で割りとハンサムな店員が発するチンピラ言葉に、店の中が凍りついた。

でもすぐに溶けた。皆が皿を持って顔を見合わせる。懐から何やら用紙を取り出す者も居た。

「ぶ、ぶち殺すよこの野郎!? つーかそれが客に言う言葉か!」

「あーあーすみませんおきやくさまごちゆうもんをどうぞ」

「聞けよエセ童顔!」

怒る銀髪の少女。その怒気は、並の者なら腰を抜かしそうなほどに

鋭い。

だが目の前に居る少年店員は、心底めんどくさそうな顔をするだけだ。

「んで、何を食らうって？」

「くっ……とりあえず串10本だよ。とっとと持ってきてきな」

「はい、分かりました！ それよりもサラダを食べたらどうでしょうか、野菜が足りてない風味の、いかにもな顔してるしね！うん、栄養たっぷりなんで色々と元気になること間違い無し！ 僕アイデアの店長アレンジした逸品から美味しいし！」

……その貧相な胸も、もしかしたら育つかもな」

「てめ………最後、なに言いやがった？」

「あーあー何も言っちゃおりませんよ、ナデ……………ナイ……………ナイ
チチ？ 元お嬢様」

「よし斬らせる」

一息に腰の仕込み杖を抜き放つ少女。

対するジュードも、手に持ったお盆を構える。

「はっ、そんなもんでこのアタシの一撃を防げるとでも思ってたのかあ？ くされ医者のおもドキ類狂人科生物が。ついに脳の中までやられちゃったようだねえ」

「元からイカレてるわ、このエセ貴族が。それに、このジュード・マティスを侮ってもらっては困るね。」

「あの”ソニア師匠に教えを受けた僕に、できないことがあるとでも？」

「くっ、このマスコンが……………」

ちなみにマスコンとは師匠マスターコンプレックス。つまり師匠馬鹿である。

一方、同じ店内に居た周囲の客は慣れた様子で、「やれやれ始まったか」と言いながら自分の皿を持って店の外に避難していた。

一部では今日はどっちが勝つかで賭けが始まっている。

「ふん、どうしてもやるってーのか？」

「今更命乞いか？ つつーか僕が師匠の事を思い出していたのに横から話しかけたお前が悪い」

「原因それかよ！ ていうか、客のアタシが店員に話しかけて何が悪い！？」

「眼つき」

「ぶっ殺おおおすー!」

「いいぜ来いよ、ナディア!」

「てめ、覚えてんじゃねーか!」

ナディアと呼ばれた少女の言葉を開始の合図に。

二人のmanaが、年齢にはそぐわないほどに大きく膨れ上がった。

そのまま、真正面から激突

「てめえら外でやれええー！ツ！」

しよつかという直前、店長がぶん回した光り輝く棍が二人に直撃。

小柄な身体を2つ、盛大にふっ飛ばした。

「ぶろツ?!」

「てめっ?!?」

あまりにも鋭い一撃を受けた二人が石のように軽く、弧を描いて飛

んでいく。

そのまま、道の向こうにある池へと落ちた。

ぽちゃんという虚しい音が響く。

「あーあーお客さんいつもすみませんねえ。え、俺に賭けた客が居るって？」

そりゃアンタ嬉しいことだねえ。で、儲かったよねえ………今日入った特製肉の串盛でも注文してみるかい？」

喧騒が続く。

中央の灯火がかすかに届く薄暗い裏町の、地元では有名な店では今日も客たちが騒いでいた。

かつて、誰かが言った。

人の願いは精霊によって、現実のものとなり、

精霊の命は人の願いによって守られる。

故に、精霊の主マクスウェルは、全ての存在を守る者となりえる。

世に、それを脅かす悪など存在しない。

あるとすれば……それは、人の心か。

「ぶはっ、おいこら店長、前に不意打ちすんのは無しっつたろーが！」

「あーあー、不意打ち受ける方が間抜けなんですー。実戦にルールなんて無いんですー。」

そんな事わからないなんてナディアちゃんはお馬鹿なんですー」

「キモイんだよクソジュード！ あと、ちゃん言っな！ ったくさ

「つさと上がるぞー！」

ならば、精霊に見捨てられた者はどうなるのというのか。

現実をただ生きるだけで。何かを願うことすらも許されないのか。

故に、精霊の主マクスウェルは、全ての存在を守る者とはなりえない。

見捨てられたものを悪と断定するなかれ。善の定義などどこにも在ることはなく。

この世界に善と悪を分けられる明確な境界などは存在しない。

もって、守られるべきものなど、どこにも存在し得ないのだから。

あるとすれば……それは、人の心か。

「あー、冷えるぜ……………弱炎舞陣」

「おお、あったかい」

「…………フレアボム！」

「熱ッッ!？」

「ははっ、ばーか」

「くそ、性格悪いな！」

「お前が言つな！」

これは、人の心が交差することによって浮かび上がる、どこにでももあるストーリー。

叶わない、物語である。

叶わない、物語である。

プロローグ（後書き）

勢いで行きます。ジュード性格改変。

ストーリーは原作沿い。

1話 「目と目が会った」 (前書き)

瞬間、敵だと気づいた。

殺し合い夜空。そういつ日もある。

1話 「目と目が会った」

リーゼ・マクシア。精霊と人が共存する素晴らしい世界。

そうほざいた奴の頭を、無性に殴りたくなる時がある。それが今で、此处だ。

この世界にある二大国のひとつ、ラ・シュガルの首都。

夜の霊域が発達している、常夜の街の中心で、一人俺は座っていた。

一応は敵国となっているア・ジュールの影もない。20年前は大きな戦争があったらしいが、最近はその噂も聞かない。

平和な街の中、一人でその夜空を見上げていた。

前を見ればやるせないからだ。そこかしこに存在する、精霊術を使う人達。

風を足場にして、街灯を調整する職人。橋のへりを修復する職人。水の精霊術を見せ合っただけのカップル。

自慢気に小さい火の玉を友達に見せつける少年。何気なく、当たり前のように使われる精霊術。

そのすべてが目障りだ。いつそまとめて潰したいぐらいに。

こいつもそつだ。後ろに居るバカ女。気配を殺して忍び寄る火使い。

イフリートに愛されているかのように、炎を自在に操りやがる天才。それを自覚している所が余計にむかつく。

「……………ちつ、街中で物騒な殺気出すんじゃないよ。つーか、気づいてたのか」

「お前みたいなクソ騒がしい、面倒くさい気配の持ち主なんか他にいねーよナディア。気配も消せてねー。つか、ふつーに来いふつーに」

「はん、飽きずに辛気臭い顔しててムカツイたからさ。後ろからその間抜けな後頭部を殴ってやろうと思っただよ」

「なんで親切売る見たいに？ それに、お前に言われたくはないな」

「アタシもアンタにだけは言われたくないよ……………で、できてるんだろ？」

「くくくくまじぶ」

言いながら薬を後ろに放り投げる。

薬の名前は「グッド・ナイト」。命名したのは店長。

この薬は、そこいらの店には売っていない、曰くつきのシロモノである。

まあ、ただの安眠薬なんだが。

「まったく、お家でお抱えしてあらせられるお薬師にお頼み申せばいいだろうになあ?」

「敬語のつもりかそれは。ま、あのヤブにはいの一に聞いてみたよ。アンタに借り作るの嫌だったんでなあ」

「だろうなあ」

「ああ。でも、こんなもん作れねーって。無駄に手え光らせるのは得意みただけどねえ」

「……………治療術と言ってやれよ」

ああ羨ましい。まったくもって羨ましい話だ、それは。

分かって言ってるやがるなこいつも。

「まったく、外傷消すだけとか、ただのグミと変わりねーじゃねーか……………いや小煩くない分、あっちの方がマシってもんか？」

「ついにはグミ以下かよ……………でもこんなもん、医者としてはふつーだろ？ 薬学も学んで一人前って教授は言ってたぜ？ つか、一昔前にはふつーに作れたはずだけどな」

外傷を癒すのだけが医者役目じゃなかったはずだ。ここいらの医療室もった医者は縁もないんで知らないが、ハウス教授や、故郷のル・ロンドで治療院を開いているとうさ……………親父は違った。

母さんも。患者を見て、何が悪いか“診て”。それから治療をしていた。治癒術で治せるのは外傷だけだから。

「はっ、おべっかとおえ光らせて傷を癒すだけは一級品だけだなあ。生憎と知識の幅はお前にすら劣ってやがるよ。ああ、そっぴゃ口も上手かったかねえ」

「世も末だなー」

「貴族のとこ行く医者なんてそんなもんさ。元がいいとこの坊ちゃんだ。貴族様にもわかりやすく、見えてる傷だけ癒すのが仕事だ。せいぜいが風邪薬程度。その点、アンタは本当に変態だね？」

「お前はあばずれだけだな。で、いい加減金払えよ」

「あいよ」

投げ渡されたガルド入りの袋。

それは今までよりも少し多かった。

「おい？」

「色つけとくよ。で、余分があればそれも貰いたいんだけど？」

「……………おらよ」

懐に持っていた分　自分用も投げ渡す。

どうせ、家に戻れば残っている。惜しい程でもない。

「限量だけは間違えんなよ。お前のことだから自殺だけにや使わねーと思うけど」

「はっ、自殺なんかするかよ。それならお前に殺された方がマシだ」

「……………ああ、絶対にしねーなあ、それは」

「だろ？　そうだな、アタシが自殺するなんて

「

一息おいて、ナディアが言った。いつものように。通常の会話をするように。

何でもないことのように。

「それこそ、アンタが精霊術を
ぐらいに、有り得ないことさ」

治癒術を使えるようになる

沸騰した。脳の中が一瞬にして沸き立った。

まあ、このクソ女が。よりもよって、よくもそのことを面と向か
って、言ってくれやがったもんだ。

ああ、わかってるさ。言われたいんだろ？

なら、俺も奥の奥の傷まで引っ掻き回してやるよ。

「ああ、そうだなあ？ 貴族のくせに ヒス起こして手前の
家に放火した、お前ぐらいにありえねーことだわなあ？」

「
テメエ」

「
なんだよ？」

一触即発。触れれば即爆発。

そんな良い感じに、空気が緊張する。

俺は拳に。ナディアは仕込み杖に。

互いの武器に手をやって、殺意をぶつけ合う。

でも、それが開放されることはなかった。

「…………ちっ。アンタも言いたいこといいやがるね」

「お前もだろうが。こういうのって、なんつーの？ 気の置けない友人っつーの？」

「思ってもないこというんじゃないよ」

そう。そんなことは思っぢゃいない。

俺にとってのこいつも、こいつにとっての俺も、そんな生なもんぢゃない。

ただの無機物。冷たい外見をもつ、たたの“鏡”だ。

今でも思い出す。平原で俺はこいつと出逢った。

最初は、共感した。次の瞬間に憎みあった。それは必然だった。互いに似たものを持っていて。酷く似通っていて。

本当に見たくもないものを、自分の肉眼で見せつけられたから。それはこいつも同じようだ。

次の瞬間には、殺し合いになった。

途中、偶然そこに立ち寄った店長に止められて、最後までは行かなかったけれども。

でも、今でも関係は変わらない。

……こいつは鏡で、俺は鏡なのだ。

真実そのままに互いの姿見と心を映し合う、“真実の鏡”。

互いに似たような傷をもっていて。それで互いが、“奥に持っている傷を忘れることを許さない”。

（店長は同じような傷を持っている者が出逢った場合。それが男女なら、傷の舐め合いをするような関係になるって言うていたけどなー）

有り得ない。そうはならない。絶対にならない。出来るはずもない。

舐めあうぐらいなら　　傷つけあい、殺しあう方が万倍ましって
もんだ。

でも、ああ、本当に非生産的も極まる関係だよなあ。

でも、一緒にいて退屈しない間柄。腹は立つが、自分が死んでいないことを思い出させる程度には役に立つ。

それに、味覚に関しては似通っているのだ。

まあ、付け加えて言えば、互いの奮発剤にもなっていると思うが。

このままでいられるかと、初心をまざまざと思い返させてくれるのだ。見るだけで思い出させてくれる。

あの心を忘れるな、と。

でも行き過ぎるのもしょっちゅう在る。計算できないのが世の常。

さっきみたいに、殺気のやり取りをするのも日常茶飯事だ。慣れたもので、日常の一風景と化している。

でも、それなりに上手くやっていた。以前は傭兵として互いに雇いあったりしていたし。

俺は目的の資料を探す度の護衛に。こいつは、よく分からない任務だかなんだか知らないが、変な仕事の護衛に。

きな臭いが、実力は信用できる。

一度頼まれたら、絶対に裏切らない所も。その点でいえば、どの傭兵よりも信頼できる。

今はもうどちらもそれなりのレベルになったので、最近は雇う間柄でもなくなっただけだ。

「で、入り用ってなんでだ？」

「ちょっと大きな仕事になりそうなんでね。しばらくはあの店にも行けなくなる」

「そうかよ。でも、店長が寂しがるなあ」

「……………あの人も物好きだね」

魔物の肉で串焼きを初めて、10年。今では裏町限定だが、人気店の一角となった 串焼き屋『モーリア坑道』。

何故に飲食店なのに坑道とか、そういうことを言っちゃいけない。あの店長にまともに突っ込んで答えが帰ってくるとも思えないから。まあ、たまにちょっと酷い味付けの肉を出してしまうことがあるが、大概は貴族様をもうならせるぐらい美味しい串を出す、迷宮のような迷店 違った、名店だ。

グスタフ店長は本当に頭のイカレタお方で。具体的にはモンスター“ジエントルマン”の肉を調理しようとか言い出しやがりました。きつと、あんな事言い出したのはこの人が世界で初めてなんじゃないかろうか。

無駄に、多方面への新商品開発意欲に旺盛で、先週あたりに道具屋

へ緑と黄という素晴らしい色合いのグミ
ドリアングミを提
供していた。ドリアンで、あんた。

効果はおして知るべし。でもギャンブル性とスリルがたまらないと、
一部のイカレタ傭兵には人気なんだとか。

ちなみに、店長も以前は傭兵 本人曰く、冒険者をやっていた。
腕も立ち、ア・ジュールの武道大会でも決勝までいったとか。

で、武術の師匠はソニア先生だ。つまりは、俺の兄弟子にあたる人。
少し前にソニア師匠に手紙で聞いたけど、“あいつは筋だけは本当
に良かった”と言っていた。

それもそうだろう。あのど外れて制御が難しい活身棍を使えるのは、
師匠を除けば二人しかいない。

グスタフ店長か、ソニア師匠の娘で俺の幼なじみであるレイアぐら
い。

店長の腕は今でも衰えておらず、真正面からやれば俺でも負けるだ
ろう。

でも割りと寂しがり屋だ。

あと、本人が変人だからか、変人から好かれる。例えば目の前のこ
いつとか。

「変なこと考えてるね？」

「ああ、いつもな。でもって、お前もな」

「胸を張っていうことかよ……………ああ面倒くさいなアンタは、ほん
とに。」

……………いいさ、黙って帰るよ。それじゃあ　生きてりゃまた変な
ところで会うかもね」

「なんだそりゃ？ ……………まあいいや、良き夢を」

「……………そりゃ、死ねってことかい？」

「言わせんなよ恥ずかしい」

互いに毒を吐きあって別れる。

そのままぼーっとすること数分。近くに、銀髪で炎染みた気配を放
つ小娘はいなくなった。

しかし、入り用でしばらく顔出せないか……………初めてのことだな。

「えっと……ジュード、くん？」

「はい？」

突然かけられた声へ、反射的に返事をする。

この声は……ハウス教授の、診察の時の助手の人か。足がきれいな人。

「こんな所で座り込んで、何をしているの？」

「この風景を見ているんですよ。普段は忙しいですから。座ってみるイル・ファンの風景も、またおつなものですよ？」

「ふふ、そうね。私も暇ができれば一度試してみようかしら」

他愛もないことを話しあう。

ああ、心が癒されていく……他意もなく敬語を使える相手なんて、この街じゃ4人ぐらいだからなあ。

「それで、何か用事があって来たのではないのでしょうか？」

「ああ、そうだ！ えっと、ハウス教授が呼んでいるんです。なんでも、実験の手伝いをして欲しいって」

「分かりました………っと、そこ段差になってます、気を付けないと危ないですよ？」

会話をしながら、僕は助手の女性と一緒に、医学校へと歩をすすめる。

空には、いつもと変わらない。遠い夜空が広がっていた。

「叶わない夢のために、か……………本当にバカだよ、バカジュードが」

「あの、アグリア様？」

「分かった。研究所には顔も聞く。しばらくは入り込んで情報を集める。そう、陛下に伝えな」

「了解しました」

下がっていく部下。その服装はこの国のものだが、身のこなしは違う。

銀髪の少女は、去っていく部下が姿を消すのを確認すると、空を見上げた。

相変わらず遠い、とつぶやく。

「ふん……………次に会う時は本当に殺し合いになるかもね」

面白くもなさそうに搾り出されたその言葉は、ただイル・ファンの夜空へと消えていった。

1話 「目と目が会った」 (後書き)

アグリア「アタシに何か用かア？」

ジュード「アグリア……お前が改心して仲間になるって思うプレイヤーが居るのなら！ 僕は、その幻想をぶち殺す！」

アグリア「へっ、やってみる三下ア！（涙目）」

なんてことが浮かんだ。鈴科百合子様もといザギロード様パネえっす。

っーかこれ、なんか……アグリアがヒロインっぽく見えね？

ちなみにナディアはアグリアの前の名前。アグリアは源氏名、らしい。

2話 「過去から今」

僕には夢がある。成りたいものがあつた。

小さな頃、両親が営む治療院で見たもの。治療され、苦しみから解放された患者さん達の笑顔が、僕の原風景だ。

自慢の両親だった。昼夜問わず患者のために働いていて、多くの人に感謝されていた。あの頃、僕は両親を誇りに思っていた。

自然と懂れた。将来の夢と聞かれた時の答えはひとつだ。『とうさんやかあさんのようなおいしやさま』。

だけど あれは、6才の頃だったか。将来のためにと、近くの精霊術師から精霊術を習った。

他の同年代の子供と一緒に。そして手順と危険さが説かれた後、いざ実践しようとした時だ。

課題は小さい風を吹かせる、風の精霊術だった。

あの時の絶望は、今でも覚えている。

言われた通り、頭の中で念じて、手をかざす。

手をかざす。念じる。マナを身体の中から発する。

かざす。念じる。念じる。念じる。

今でも忘れない、今も残っている違和感。どんなに呼びかけようとも、精霊は答えてくれなかった。

いかにがんばろうとも。マナを絞ったとしても。

精霊術は、発動してくれなかったのだ。

一緒に学んでいた年代のあいづらは、その効果の差はあるけど、発動させることじたいは失敗していなかった。

その日から、僕の試行錯誤が始まった。

本当に色々試した。先生から事情を聞かされた父さんと母さんの協力の元、その原因を調べてみた。

いったいなぜなのだろうと、原理を徹底的に学んだ。

精霊術の原理など、何回復唱したかわからない。

精霊術の原理は、本当に簡単なものなのに。

人が、脳の霊力野と呼ばれる器官から世界の根源エネルギーであるマナを発し、マナを糧にしている精霊たちに分け与え。

その見返りとして、精霊が発動させてくれるもの。それが、精霊術。

なのに僕にはそれができない。マナはある。ない人間などいない。だけど、精霊に分け与えることができない。

そうして、何度か試して、分かったことがある。

僕には、“靈力野という器官そのものが存在しない”のだ。

小さいのではなく、全くの無。それを理解した時、僕は絶望した。

医療術は水の精霊術の応用。それが使えない僕は、医者にはなれない。

10才の時。山ほどの本を読んで、知識を得て。

必死になって理論を組み立てて、その終わりに導きだしてしまった結論。

僕は、描いた夢の崩壊を、理解した。

それから本当に色々であった。

師匠と出会えたのは、本当に僥倖だったと思う。

もしあの人がいなかったらなんて、考えたくもない。

その後。僕がソニア師匠の元で教えを受けて、それなりに立ち直ってきたある日。ル・ロンドにハウスと名乗る医者が治療院にやってきた。

目的は親父と母さんの治療を見るためだ。風変わりな治療をする珍しい医者として、二人共それなりには名を知られている。

二人は快諾した。代わりに、と僕の体質というか根本的欠陥について診てくれと言った。

ハウス医師はこの国ラ・シュガルの首都、イル・ファンにあるあのタリム医学校で名が売れている、高名な教授らしい。

そこで僕はふと考えた。そんな人ならば、あるいは僕の組み立てた理論の中に破綻を見つけてくれるかもしれない。

末に出した結論を否定してくれるかもしれない。

だが、現実には残酷だった。しかし、得られたものもあった。

ハウス教授は、そのような欠陥をもつ人間を知っているという。ただ、あまり他人には言えない人物で。

その人達が精霊術を使えるように、と。ある意味での治療を施すために、と裏で研究を続けているらしい。

僕は歓喜した。そんな研究をしているなんて。そして、僕の頭にも興味を持たれたらしい。

その後、タリム医学校に誘われた。教授の助手として、また医学の知識を深めるためにこっちに来ないか、と。

親父は、何故か　　賛成しなかった。しかし、反対もしなかった。特別それに思うところもない。すでに親父に対する思いは諦めが勝っている。

母さんは背中を押してくれた。料理は作れなくなるけどごめん、と謝った。忙しい二人の代わりに食事の用意をしていたのは僕だったから。

ソニア師匠も、力いっぱい背中を押してくれた。良かったねと満面の笑顔を浮かべて。ちょーっと威力が強すぎて10mほどは吹っ飛んだけど。油断をするんじゃないよ、らしい。

いや師匠様、何もイル・ファンに乗り込んで戦争しにいくんじゃないんですから。ちなみに背中 of 紅葉は2週間消えなかった。相変わらずあの人はパネエ。

でも、その言葉は俺の宝物だ。でも、「自分に怠けて弱くなったら………わかってるだろうね？」と言った時の眼光は超怖かったです。

ソニア師匠の娘と一緒に修行をしていた同門。かつ、幼なじみであるレイアは別れを告げると泣いていた。

泣きながら活身棍をぶちかましてきた。低い軌道での一撃が金的に当たった。俺も泣いた。今なら言える。あの貧乳が。

そうしてやってきた首都・イル・ファンは都会の中の都会だった。夜域の靈勢に支配される、常闇の都市。ラシユガル王のお膝元。

多数の貴族が住まう、リーゼ・マクシア最大の都市。

その作りは、たしかに美事だった。夜に浮かび上がる樹の街灯は美しく、街をほのかに優しく照らしている。

建物も違う、故郷のル・ロンドとは明らかに異なる近代的なつくり。

医学校や、海停に繋がる道がある中央の通りでは、まるでお伽話の国のような、幻想的な光景が見られる。

でも、何故だか僕はそれが好きになれなかった。中央から外れた、暗い裏道に惹かれた。

暗い趣味をしているな、とは店長の言葉。まあ、その御蔭でいいバイト先を見つけられたんですけど。ナディアアっつー名状しがたい関係の悪友とも会えたり。

いや、あっちは会っちまったって感じか。出会いは選べないって看護婦の方が言ってたけど、それって本当ね。

イル・ファンの生活は目まぐるしい。助手としてハウス教授を手伝い、自分も知識を蓄える日々。

休みの日には遠出をしたりもした。

ラ・シュガルや、時にはア・ジュールにも足を運んだ。

本を片手にあちこちを周り、色々な薬草や古代の本を探した。もしかすれば、精霊術を使えるようになる何かがあるかもしれないと思つて。

残念ながらそつちの方では結果が出なかったけど。

そうして、今に至る。

医学校で学んで。「え〜精霊術も使えないなんて〜」「精霊術が使えないのが許されるのは5才までよね〜」とかほざくビツ……………もとい医学校の医学生達の白い目に耐えながら、ようやくここまでこれた。

夢を叶える第一歩。いよいよスタートラインに立てるのだ。

ナディアが姿を消して2ヶ月。教授の研究もいよいよ大詰めらしい。論文もできているとか。

詳しい内容は聞かされていないけど、推敲も理論の見直しも九割九分は完了していて、明後日ぐらいには発表できると言っていた。

らしくなく、興奮している。

「へえ、なのに坊主はこんなところでなにしてんだ？」

とおっしやるのは、ここガンダラ要塞の門番さん。本名はモーブリア・ハックマン、年は34のおっさんである。

「きまってます、日課の修行ですよ。今日はちょっとはりきりすぎちゃいましたが」

「あー、魔物がポンポン飛んでたけどお前の仕業かこのクソ坊主」

「つい、出来心で」

「お前は出来心で魔物を空に飛ばすのか……ああ、坊主だから仕方ないな、坊主だから」

失礼な。僕の名前はジュード・マティス、15才ですよ。

イル・ファン医学校に通う医者のおやをしている、どこにでも居る医学生なのである。

そう、そこいらの青臭い少年少女共と変わらない。無意味に明日にワクワクしている青い春も真つ盛りなお年ごろ。

「じじじッコミどころだよな？ ええ、青い春だと？ むしろ笑いどころ？」

「ええー、本当に失礼ですよこの門番ふぜいが。僕はただの純朴な少年。はい、レポート」

「クソガキが。つつーか何度も教えただろうが、いい加減名前と呼べよ！ あと口が悪い！ 俺は一応軍人だぞ！？」

「えっと確か……………ミスター、モン・バン？」

「ガアッ！！」

言っと、門番さん、別名モン・ balan さんは顔を真つ赤にして威嚇してきた。

ちなみに相方の兵士は今日も苦笑気味である。いや、街の衛兵さんとは違って懐の広いこと。

しかし目の前の門番さんは狭量だ。いや、たまたま機嫌が悪いよう。

どうせまた仕事が忙しいやらなんやらのやりとりで嫁と喧嘩したんだらうけど。

原因は家に帰れないからか。まあ奥さんも大変だよな。事情もあるけど。

「もっと人員増やせたらなあ」

「それはそれで嫌なくせに」

このガンダラ要塞の門番って鍛えられた軍人と言えどそうそう成れるもんじゃない。

けど、一種のステータスでもある。だから仕方ないと思うね。

最近は特にひどいらしいけど。

街に飲みに来る衛兵さんも愚痴っていた。妙な研究棟の警備やその他もろもろに人手を割かれてるせいで、ローテが厳しくなっている。

それに、日帰りでの急ぎ旅は危険だ。迂闊な真似をすれば、二度と帰れなく可能性が大。

なんせ、首都イル・ファンとここガンダラ要塞を結ぶ街道に徘徊している魔物の強さは、かなりのもの。

ここいらの魔物3体を同時に相手すると想定した場合、精鋭部隊を4人程度は用意しなければ完勝は見込めないだらう。

「なら、その魔物を蹴散らしながら往復するお前はなんなんだ？」

「ただの医学生です」

「お前のような医学生がいるか！」

なに、失礼だなこの人。それにこれぐらい、元貴族の令嬢でさえや
つてのけるさ。

「ええ、最早令嬢じゃないだろそれ……………」

何かを想像したのか、してしまったのかモンバーンさんの顔が青く
なっていく。

あ、ぐったりした。

きっと2m超のメスゴリラみたいな姿を思い浮かべているのだろう。

あるいは、この要塞にあるというゴーレムにた令嬢型最終兵器み
たいな。

(うん、今度会ったときにナディアに言ってやる)

新しい喧嘩の種を考えつつ、僕は荷物の中から娘さんの手紙を届け
てやった。

不機嫌な顔で受け取るモンバーさん。

「……………助かる。しかしお前でも、一人ではここいらの魔物をまと

めて相手するのは危険だろう?」

「師匠とのガチンコ勝負に比べたら億倍ましです。まあ、これもいい修行になりますしね」

あと、娘さん美人だし。奥さんも美人だし。

なんで、たまに家庭のことで悩んでいる門番さんを、相棒で今横にいる門番・式型さんが睨んでいることがある。

もげろ、とか。

最近は掘るぞ、に変化している。え、なにそれ怖い。

「……………尻が、なんかむずむずするな……………ともあれ坊主、あれはどこまでいった?」

「ここまですよ。ちょっと最近は打ち止めぎみですね」

と、腰につけている自分のリリアルオーブを見せる。

これは持ち主の潜在能力を覚醒させるためのアイテムだ。

戦闘を重ね、経験を重ね、強くなっていくごとに成長の種子が花弁のごとく開かれる力の華、といえはいいだろうか。

その内容は持ち主ごとに異なるが、人によって限界が違ふという。
一枚の限界層は9層。

で、一般人は3層程度で打ち止めらしい。普通の軍人で5層程度、
近衛の精鋭部隊で8層程度まで。

比べて僕は、“2枚目”の1層めに突入中。ふつーに2枚目、とか
出てきた時はびっくりした。

ふつうに日課としてイル・ファンとガンダラ要塞の入り口前までを
往復していただけなのに。

ちなみに2枚目に突入しましたー、と伝えた時の門番さんの顔は忘
れない。

「この最終兵器医学生が」とつぶやかれたことも。つーか、最終兵
器で。なんていうことを言っただモンペさん。

「っせ。じゃ、ありがとよ」

と、レモンダミが投げられる。これも結構高いものなのに。

やっぱり、この人はなあ。こっちは礼を言っべきか。

「ありがとう………およろなら、モブ」

「さっさと帰れ！」

んん、なんで怒るんだろう。

親しみをこめて、本名のモーブリアを略して呼んだだけなのに。

「いいから、ガキがこんなところに来んな！ 大人しく医学校でお勉強しとけ！」

つまりは、学べるうちに学んでおけよ、と。

そんな、何だかんだいってお人好しな門番さんの言葉に、手を上げて応えながら。

僕はイル・ファンに帰るべく、足を踏み出した。

2話 「過去から今」(後書き)

原作のジュードはムツリ。

こっちはわりとオープン。

…………… 何がか、は言わずとも分かりますね？

3話 「今が変わる刻」

治療術を使うには、3つの工程を踏破する必要がある。

まず、治療術をかけるべき部位の特定。

次に、術者がその部位にマナを通せるのを確認すること。
最後に治療術の行使、この3つだ。

各々の技能の精度は、それぞれ鍛える必要があつて。技能が高いものほど、その効力は高まっていく。

ちなみに通常の医師なら、この3工程を一人でやってのける。

だけど、学生の身ではその域まで至れない。特に一つめ、治療部位の見極めが難しいのだ。

だけど僕は違う。かつて自分を変えるため、必死になって勉強した人体の構造。

知識は、数年勉強した程度の学生よりも遥かに上だ。

「次。肘の関節の………そうそこです」

「分かった………っと、行きますよ」

患者は、転んだひょうしに肘を痛めた建築職人。

まずは僕が怪我をした時の状況を聞いて、触診。治すべき部位を特定すると、隣にいる医学生Aにそれを伝える。

あとは簡単だ。教えられた通りの部位に医学生Aが治療術を行使した。マナが上手く通って行く。

「ちょっと出力強い。0.2ほど下げて」

「分かりました」

前もって決めておいた基準。その指示通りにA君が出力を下げる。すると、うまいぐあいにマナの通りが患部へと集中していった。

そのまま数分。僕は触診しながら患者さんに終わりましたがどうですか、と聞いた。

「ん…………もう大丈夫なようです！ いや、やっぱり第五治療室は仕事が早い！ 他は今でも外で並んでいるのに！」

「褒めても何も出ませんよ？ ああ、治療は終わりましたが、3日は安静にしてください。関節の怪我は厄介ですから」

「う、分かりました。それではありがとうございます」

顔をひきつらせながら去っていく患者さん。なんか、仕事の納期とか厳しいのかな。

それとも親方が怖いのか。まあ僕のしつたこっちゃんないけど。

「あゝ、今ので終わりですよね？」

「はい。とりあえずは。これ以上は規定に反しますし、他の治療室の方にもいい顔はされませんから」

「それにしても、今日はけが人の数が多いですねえ。今の時期は特に観光客も少ないし、原因については特に思い当たりませんが……
…ありましたっけ？ 何か怪我が多発するようなことが」

「私も思い当たりません。が………先程の方が言われていた言葉が気になりますね」

「………“微精霊”がない、ですか。ジュードさんもそのあたりはどう思われ………」

と、そこでA君が言葉につまる。やつちまったという顔をする。

まあいいけどな、他の奴らがするような殴りたくなる顔じゃないし。

「で、でも微精霊がいなくなるなんてありえないですよね！」

「そうですね！ でも、確かに医療術の調整が難しかったですよ。いなくなったは大げさですが、その、少なくなったような感覚が………」

「僕にはわかりませんけどねえ。ええ、ちつとも分かりませんよ」

マナの動きなら分かる。だけど、微精霊の動きとか正直感じ取れん
のよ。

現象となつた精霊術なら肉眼で確認できるから見えるけど、接したこともない相手なんぞはなから想像の範疇なのよ。

って、僻んでないですよ。だから顔色を元に戻して下さい。別に貴方の事は嫌いじゃありませんから。好きでもないですけど。

と、僕の下降していく機嫌を察したのか、Aの野郎は慌てたように立ち上がる。

「お、お疲れ様です！」

と、頭を下げてすたこらと去っていくA氏。ちょっとからかっただけなのに、繊細な人だなあ。

あ、戻ってきた。そうだよな、業務日報書かなきゃならないもんな。僕に押し付けて帰るようならマジで睨むよ。

つと、僕はそろそろ帰るか。今日はバイトもないけど、ちょっと疲れた。

そうして立ち上がると、看護婦さんがねぎらいの言葉をかけてくれる。

「あ、ジュードさん、本当にお疲れ様でした」

「いえいえ、僕はただ指示を出していただけですよ」

マジで。言うが、医学生A君が看護婦さんの言葉に追随する。

「でも、患部の見極めは完璧にできていたじゃないですか！ あと、

マナの調整を細かに指示するなんて教授にも出来ませんよ」

医学生Aが興奮している。ってこれは演技じゃないか。いや、僕より3つは年上のはずなんだけど……この人は謙虚だなあ。

この医学校にしては珍しく、僕を奇異の目ではみない。大半は虫を見るかのような眼で見ってくるのに。

ちなみに僕はそんな眼を向けてくる奴は無視する。

そのことを目付き悪いソバカスに言うと、「2点だ」と返された。ダジャレじゃねーっつの。

あと、A君が言っているマナの感知だが、あれは修行と一人旅の中で身につけたものだ。

調整というか把握は、身体能力強化の基本だからおろそかにできない。特に自己強化が力量に等しくなる武器を使わない拳法使いだから、マナの調整こそが戦闘の基本にして奥義となる。

強化しそこねた状態で亀モンスター殴ると死ねるからね。で、拳を潰された拳士など医療術の使えない医者と同じだし。

「……………」

「……………じゅ、ジュードさん、何でそんなに落ち込んだ顔を？」

「いえ、ちよつと自分の胸を自分で突き刺してしまつて」

笑顔で言つと、引かれた。看護婦さんでさえ顔をひきつらせている。つと、それよりもだ。

「ハウス教授はまだ戻られる気配がないようですが……………今日はどちらに？　　というかそもそも、何で僕を？」

なんで僕を呼ぶのかあの人は。急すぎるし、何より“これ”は嫌だつて前に言つたはずなのによ。

いくらA君でも、こうして治療を手伝うような真似は御免被る。教授がそのことを忘れるとも思えないし、何があつたんだろうか。

「あ、すみませんハウス教授の指定です。ジュードさん以外には任せられないと。その教授は、その、今日は……………どうしても外せない用事があるようですよ」

「あ……………それなら仕方ないですかねえ」

そろそろ論文の結果が伝えられる頃だし。それに、あの人はこうと決めたら割りと他のものは見ない。

それに、教授という高い役職を持っているのに、らしからぬフットワークの軽さを見せることがある。

椅子に座つて指示してれないのに、何かと自分で動きたがるのだ。

あとはあの年まで医療の道一本で生きてきたせい、独自の価値観というか、視点をもっている。

経験とか関係なく、素質や才能のみで人を見るのだ。ここを任せたのも、僕ともう一人のA君が居れば大丈夫だと判断したからだろう。この世界において精霊術を使えないというのは 結構な眼で見られることになるのだが、ハウス教授はそんなの関係ねえとばかりに無視をする。

人間クサイところもあるんだけどね。いきなり突拍子も無いことをするときもあるし。

一年前は本当に驚いた。部屋をノックされ、現れたのは渋面を浮かべた中年。否、ハウス教授。

何事かと聞けば、「娘の誕生日プレゼントに行くからついてきて欲しい」とか。

いや、貴方教授でしように、相談する同年代のおっさん友達とかいないんですかと。

遠まわしに聞いて、その答えが「娘さんと同年代である僕の意見を聞きたかった」らしい。

友達の有無に関しては華麗にスルーされた。うん、やっぱり教授にまで上り詰める人間ってこんな風にどこか変だから、友達とかできなかつたんだらう。

研究一本だもんなあ。論文を発表した先々月からは特に忙しくなった。文の評価はまだ得られてないが、国の上層部から及びがかかったらしい。

どこかのスポンサーがついたとかで、研究費も潤って、最近では今

までに来れなかった研究にはりきっているらしい。

らしい、というのは僕はその件に関しては手伝っていないからだ。

何でも、精霊術を使える人でないと駄目らしい。

「しかし、論文の結果はどうなったんでしょつかねえ」

「教授自身、渾身の自信作だったようですけど……」

と、そんなことを話しているときだった。

医務室に突然飛び込んできた彼。僕を見ると少し顔を歪めたが、はつと我に帰るとそのばにいる全員に告げた。

ハウス教授の論文が、今年のハ才賞
賞である、あの栄誉に選ばれたと。

研究者として最高の

「で、本人は何処だよちくしょう……………」

ハ才賞の受賞を告げられた後。看護婦さんに、すみませんが探して
きて下さいと言われた僕は、少し悩んだ。

だが美人の頼みとあれば仕方あるまいと、僕は快く頷いた。

「嘘だな」

伝えたかったから、頷いたのだ。何より、八才賞に選ばれるということは、ハウス教授の論文が正しいものとして受け入れられたということ。

その地位は最高位になる程高くなるし、研究も進む。僕の夢への道も縮まるかもしれない。

直接伝えて、興奮を分かち合いたい。

少し、打算も含まれているけどね。

「ソニア師匠……夢に届きそうですよ」

スタートラインに立てさえするなら、後は努力しただいどうとでもなる。

でも、肝心の教授が見当たらねえ。

赴いたとされる研究棟に言っても、研究棟の衛兵は「もう帰った」の一点張り。

確かに、棟の退出者が書かれる紙にはハウス教授の名前がある。

だけど、何かが変わだ。強いて言えば眼の前の衛兵。

（ どうしてそんなに緊張している ）

一般人ならわからないだろう。だけど、僕には分かる。

筋肉も、マナの動きもそうだ。いつもとは明らかに違っている。

まるで戦闘が起こるかのような。そんな緊張が見て取れる。

(だけど、この衛兵を殴り倒すわけにもいかんし)

目立ちすぎるし、何より犯罪だ。助手の立場を追われるのは本末転倒。

そう考えた僕は、素直に回れ右をして、また中央通りの中央広場に戻ってきた。

その時だった。

「っ!?!?」

急に風が吹いて。

“その風が通るにつれて” 街灯の火が消えていく。

（ 精霊術。それも、かなり高度の）

街灯が消えた暗闇の中、一人思考を走らせる。

先ほどの風は不自然だった。特にどうというわけもないが、風というには“薄すぎる”。

あるいは、あの風に何らかの作用を持たせて、微精霊に干渉したのか。しかし、こんな広範囲の街灯を、さり気なく一気に消すとかなんなことが可能なのか？

そして、風にはマナが満ちあふれすぎている。

こんなの、見たことがない。つまりは

「普通の精霊術じゃ、ない……………?!」

突如膨れ上がった気配。

それは、膨大なマナの塊だった。

「っ、こっつて考えてる場合じゃない」

思考に時間を割いている場合じゃない。この場はどうするか。

(……………衛兵に知らせる？ いや、もう動いている。見れば橋の上立っていた衛兵が何かを確認している最中だ……………このまま医学校に戻るべきか？ いや、今の時期に厄介ごとに巻き込まれるのはごめんだけど、それは意味がない)

何かが起こっている。

ナディアの姿が消えたこと。

ハウス教授のこと。それに何より、衛兵の様子。あれは前もって何かを通達されている感じか？

いや、それにしても完全な戦闘態勢じゃなかった。要塞の門番さんも知らなかったようだし。

そこまで考えると、またマナの塊が大きくなる。

ここまで大きいと、その場所も感知できる。これは 研究棟

の方向！？

直後、爆発音。

「ちっ！！」

一歩目からトップスピード。踏み込み過ぎて板をへこまさないように、全力で広場を駆け抜ける。

その甲斐あってか、見ることができた。“水の上に残された、円形の何かを”

そして、その先にあるのは排水路だ。

が。 “入り口の檻らしき鉄の格子が壊されている”と、頭につく

「……………くそ」

水場の上に浮かぶ円形に向け、近くにある石を投げる。

予想通りに、円形の上に乗る。つまり、これは足場なのだ。

直後に消えて上にあった石は水の中に沈んでいったが、これはもう間違いない。

誰かが街灯を消して。その上で、川の上に足場を作りながら潜入して。

このいかにも頑丈な鉄の格子を一瞬でぶっ壊して、中へと乗り込んだのだ。

（化物かよ）

聞いたこともない術を使う相手。目的は何だろうか、と上にある建物を見る。

そこには、研究棟があった。

「くそ！」

毒づく。だか恐らく、迷っている暇はないだろう。

乗り込んだ人物の仕事は、それはもう“早い”はずだ。そしてこの研究棟には、あんな手練が乗り込むほどにヤバイものを隠している。

毒づきながら、僕は橋の上から飛んだ。

そのまま、落ちる。壊れた排水路の前に着地した。

あとになって思う。あれが、選択した時だったのだと。

あの時の橋の上が、それまでの生活で。

降りることを選んだ瞬間、飛び降りた直後、それが音もなく崩れ去ったのだ。

あの日、僕の“日常”は終わりを告げた。

かくして、非日常が始まる。

迷惑な女神の、あまりにも急な来訪と共に。

3話 「今が変わる刻」(後書き)

ようやく原作突入。

あと、主題歌は 『fly me to the sky / ang
elia』でよろしくお願いします！

4話 「現在喪失」 (前書き)

ヴァイオレンス・ジュード、始まります。

4話 「現在喪失」

水路に侵入して、最初に感じた気配は一つだった。

入り口の一本道から、右に曲がる角の向こう。だけど、それは警戒するに値しない。

戦闘者の練度はマナの制御によって分かる。素の筋力は確かに必要だが、マナによる肉体強化の恩恵はそれ以上に重要。ゆえに、相手を測るにはマナを見ると師匠は言っていた。

それなりの使い手なら、高いところから飛び降りても足を痛めなくなる。また、ただの跳躍で身長の数倍の高さにまで飛び上がることができる。

そして、今まで出逢った戦う者達と比べ、目の前の気配はどうか。

(凡百のどこにでもいる衛兵だ。複数配置されているわけでもないらしい)

だけど顔を晒すのはまずい。隠れている手練が居ないとも限らない。

(ポケットにあるハンカチで、っと)

ハンカチを口元にかぶせる。あとは髪を下ろせば大丈夫だ。ちょっと視界が防がれるが、この相手ならハンデにもならない。

これで変装は完了。もう気にすることはないと、真っ直ぐに進んだ。

「おい、その……止まれ！」

当然の如く見つかる。こちらを見た衛兵が、武器である鉄の棒らしきものを構えた。

「はい、止まります。あ、こんばんは。夜分遅くにすみませんが、お伺いしてもよろしいでしょうか」

「は？ えっと……違う！ 怪しいやつ、何者だ！」

「どうも。この先が研究棟に繋がってるんですね？ で、貴方はその警備と」

「そ、そうだが……いや、待て！ 小僧！」

様子が変わる。戸惑い混乱から、決意と何事か含まれたものを秘めたそれに。

「一つ聞くんが……来たのはお前一人でか？」

え、そこでその質問ですか。

ってそういうことか。ようするに始末しますが、ちょっと仲間が居ると困るので教えてくれませんか、と。

つか話の運び方が下手な。敵意見せるのが早過ぎるし。構ってる時間も惜しい、手っ取り早くすませますか。

「勿論です。貴方ぐらいならそれで十分……じゃ、今日はこの入
んで。聞きたいことは聞きました、ありがとうございます」

礼をしながら横を抜ける。衛兵はすぐには棒を振り下ろさず、その
まま通してくれる。はずもない。

すれ違った直後、背後の敵意が殺気に変化した。

こちらを侵入者と、殺すべき敵とみなしたのだろう。あるいは侮ら
れたと、怒ったのか。

どちらにせよ、衛兵の手に持つ警棒に力が入ったのは確かだ。握っ
た手元からぎりり、と肉が軋む音が聞こえる。

間髪入れず、間合いを詰めてくる。衛兵の足が、下にある水を跳ね
させた。

そのまま、振りかざしたのだろう。敵意満面に、侵入者の後頭部を
殴打すべく、高く振りかざされた鉄の棒。

輪郭さえも感じ取ることができる敵意。

だが、一連の動作の鈍さはブウサギにも劣る。

僕は振り返りもしないまま、ただ左足を軸に右足を一回転。

「あつ？」

後ろ回し蹴り。衛兵の顎に当る音と、間抜けな声が聞こえた。間もなく、衛兵はそのまま前へと倒れ伏す。

衛兵の身体が水を叩き、ばしゃりとうるさい水音が鳴った。

「遅えよ」

あくびも出ない。まあ正当防衛だし、いいか。

しかし、応援を呼ぼうとはしなかったな。きっとここは警備が手薄なんだろう。

気配も少ないので、あるいは穴場かもしれない。

行けると判断し、そのまま侵入することにした。

目的を整理しよう。

第一にハウス教授の確認。もしかしたら拉致されてるかもしれない。

「思えば、あのサイン……………筆跡が違ってたな」

思い返せば、そうだ。あれはハウス教授のサインじゃない。なぜ、そんな真似をしてまで教授を研究棟に止めようとするのか。

どう考えても碌な目的じゃない。

で、第二の目的だ。それは、この研究棟の研究内容………もとい、成果物があればそれを調べること。

ハウス教授が関わってるなら………ちょっと、その、何を研究しているか見てみたい。

第三は、侵入者の確認。

あれだけの精霊術とマナは見たことがない。滅多に見れんだろうし、見ておいて損はない。

強者を見るのもまた修行って師匠も言っていたし。

「さて、行きますか」

向こうにも気配がある。あっちに何かあるだろうと、俺は歩を進めた。

暗い水路の中。梯子を登って抜けた先は、惨状だった。

「何か、こう………凶暴な魔獣が通ったあのような？」

進んだ先には梯子があつて、その前には衛兵と犬が居た。で、同じように昏倒させた後に梯子を登ったんだけど。

ああ、研究棟は美しいよ。そりやもう美麗だ。税金返せつてぐらいに。でも、周りにあるオブジェが気品を損なわせている。

そう、怪我をした人物が歩く度に残す血痕のように、いや通った痕跡というか。

おそらくは侵入者が通ったのであろう通路の上には、気絶している衛兵や犬の姿が。いや、何というか死屍累々。

ある者は地面に、ある者は通路の端にある欄干に引つかかって洗濯物のように、また在るものは積み重なったクッションのように。

そこかしこに無惨な姿で横たわっている。

「侵入者は………やっぱ一人かぁ。傷跡を見るに火に風に水、そして土………ちっ、全部使えやがるのか」

かなりヤバイ相手だ。倒れた者達の怪我のようすから、侵入者の異常っぷりが分かる。倒れている位置と川にあった水の足場を見るに、侵入者はたった一人。

そして、倒れている衛兵の位置。恐らく侵入者は、ある一点から放射状に、強力な精霊術を行使したに違いない。

一点を基点として、放射状に倒れているから、分かる。

そういえばさつきまでドカンドカン聞こえてたな。地下のせいかな、それほどまでには聞こえなかったけど。

というか、一人で4系統全ての精霊術を駆使するとかどーよ。

旅の途中で何人か、盗賊や山賊まがいの真似をする反抗部族と戦ったことがあるけど、精霊術使いとも戦ったこともあるけど。

（それでも、一人で4種の術を使いこなしている奴なんていなかった）

加え、さほど時間もかけずに倒したということは、戦闘にも慣れているということだ。

戦うことにも躊躇がない様子。戦闘にかかった時間がそれを示している。この速度は、迷いを持っているなら無理な速さ。

つまりは、熟達した技量をもって、明確な意志の元に、襲い来るもの全てを倒した。

全員が死んでいないというのもまた嫌な点だ。短時間で倒しておいて殺していないということは、彼我の戦力差にかなりの余裕があったということ。

しかし、その侵入者の姿が見えない。

この惨状を生み出したバケモンじみた侵入者は、一体どこに行ったというのか。

そして、ハウス教授も。

（…………… 思えば、教授の様子もおかしかったよな）

なんととはなしに見せていた仕草。結論ありきで思い返せば、不審なものとして浮かんでくるから不思議だ。

論文の時からそうだった。共同研究ではないが、僕の理論の一部も用いているはず。数式もそうだ。

だが、特に僕に確認することもなかった。きっと教授はそれをきっちり理解していて、聞いてくるまでも無かったのだらうと思っていた。

だけど、本当にそうなのだろうか。ハウス教授ほどの人物が出す論文に、大きな間違いは許されない。実際、2年前に出した時は一応だが僕に確認をとっていたこともあった。

今日の急な診察補助依頼も、考えればおかしい。

あの人はあの人で、無神経な輩ではないのだ。結論から言うに、常ではない対応を取らざるを得なかったということ。

何か、強力な権力が何かが働いているのか

「って推理している時間も惜しいな」

見つかるのもまずい、まずは進もう。

そう思った時、2階から爆発音が聞こえた。

2階の正面奥にある扉の隙間が、炎の灯りに照らされる。

「……………おつかねえな」

侵入者が誰か知らないけど、こんな真正面から乗り込んで向かってくる奴蹴散らして。

あろうことか研究棟全てに響き渡るような爆発音を奏でる。自分の存在を、知らしめるように。

って、あ、また爆発した。

(……………控えめに言っても豪快な。いや、ずいぶんとゴキゲンな賊らしいね)

つーかちよつと関わりたくない手合いだろ、これ。侵入っちゅーか侵略になってるよ？

何というか、爆発音に身体を揺らされて、うめき声を上げる倒れた衛兵がリアルだ。

あ、また爆発した。

「ってやべえ！」

見れば、一階の角にある扉の向こうから気配が。こちらに向けて、多数接近中。

……あの位置的に、研究棟の奥に続く扉か。どうにもままずいな、これ。

隠れるか。

く???.???

「くっ」

何なんだこの女は!!？

「ファイアボール！」

渾身のマナを込めた一撃。不意をついたそれは、女の横っ面に吸い込まれていく。

だが、直前でガードされた。マナの魔法障壁で大半が中和されていく。
マジックガード

それでもちよっとは通っているはずだ。全部をガードされていることもない！なのに

(いや、問題なのはそこじゃない！)

「出」

声と同時に、また。

・・・

また、火の巨人が女の背後に現れて。

直後、超高密度の業火が襲いかかってきた。

「ぐっ!?!」

マジックガードで正面からそれを受け止める。だけど、威力が強すぎる。

中和できない分が、アタシの身体を焼いていく。

「……………クソ!」

火の精霊術で、真正面から撃ち負ける。こんなこと、あつていいはずがない！

それに、この女

気に食わない。

容姿。瞳。髪の毛。全てが整っていて。

そして何より

その胸はなんだ。

何なんだその胸は！　っつーか何でムカツイてるアタシは！

(くそ馬鹿ジュードが…！)

馬鹿な男の顔がよぎっちまっつ。くそ、もう忘れたいってのに何で思い出させる…！

アタシは陛下のために、って今は目の前に集中するべきだろ！

「ああ、クソ！！」

毒づいて落ち着こうとする。だが、無理だ。この女、服装もふざけてやがる。

なんて軽装だ。いや、そのマナの量を見れば納得できるかもしれない。

だけど 気に食わない。

「気に食わないんだよッ！」

ムカつく、だから潰す！

「その胸

ぐちゃぐちゃにしてやる……！」

「それは困る」

剣に力を込める。

対する女も、こちらのマナを感知したのか、今までにない真剣な表情で巨人を呼んだ。

「レイジングサン！」

稀有な才能を持つ術者が放つ、炎を伴った渾身の剣技と。

「イフリート！」

大精霊の一撃が、ぶつかる。

極大の炎が正面から衝突し、四方八方に爆裂した。

「????? side out」

2階に上がっても誰もいなかった。

いや、あっちの部屋には絶賛死闘中のだれかが居るのだろうけど。

「うわ、なんか、これ、すげーマナが膨れ上がってますよ?」

衛兵など比べものにならないマナ。

こんな相手と戦うのに、誰かを守りながら、とかハンデ付きはごめんである。

ああ、ハウス教授を助けるまで出会いたくはないな。

だから反対の、2階の上がって右側の部屋に行こうと決めた。

ドアの前に立ち、入れるか確認しようとして

「な、侵入者!?!」

踏み出す直前、ドアが開いた。

部屋の中と至近距離でまみえる。ああ、変な服を着ているが衛兵の類か。

その衛兵は驚きながらバックステップで一步下がり、腰にある何かを手に取って、構えようとす。

「掌底破!」

だけど遅すぎる。退くよりも早く踏み込み、右の掌打を衛兵の胸へと叩きこんだ。

肉を打つ手応えが、触れた先から伝わる。同時に、衛兵が部屋の奥へと吹っ飛んでいった。

そのまま転がり、壁らしきものにぶつかってやがて動きを止めた。

らしきものとは、部屋の中は暗く奥まで見渡せないからだ。

灯りが消されているのだろうか。でも、真っ暗というわけでもない。

なんせ、部屋の横には、淡い光を放つ円筒形の物体が

「え？」

物体が、あつて。

その中に、ヒトが入っている。

「……………な」

壁沿いに並ぶ、ガラスのようなものでできた大きな筒の中。その中に液体が詰められていた。

一緒に、人間も詰められている。中の人に外傷は見られない。

だけど、手足をぐったりさせて浮かんでいる。身体にも何にも、生きていないなら自然とあるだろう力が、全然こもっていなくて。

呼吸の気配も感じない。何より、マナを感じない》……

恐らく、ではなくて。

間違いなく 死んでいるだろう。

一瞬でそれを理解する。

だけど、その直後。

ハウス教授の声が。

よりもよって。ガラスの向こう《……………》から聞こえる。

意味を理解すると同時に、すぐに駆け寄る。

「教授！！」

教授が閉じ込められている。一瞬混乱するが、すべき事を見極める。教授の声は、液体の中に居るせいだろうか、この筒のせいだろうか、声も通らない。

口から水泡を吹き出し、今にも死にそうな形相を浮かべている。

そして、身体からは多くのマナが溢れ出している。

搾り取られていると言った方が正しい表現か。教授の身体から抜き出されたマナは、発生すると同時に何かに吸い取られ、そのまま跡形もなく消え去っている。

（な、んだこの装置は！？ いや、考えるのは助けてからだ！）

死なせない。思いと共に、拳に力を入れた。

「このままじゃ……………下がって、教授！」

マナの枯渇は死を意味する。こんなところでこの人を死なせるわけにはいかない。

僕は迷わず、拳を振りあげて一息ついた。

「ハアアアアッ！！」

そして叫ぶと同時に、渾身の一撃を円筒に叩き込んだ。

しかし、拳の先から返ってきたのは、予想外の“硬い”手応え。

その手応えが告げる予感嫌なもので。そして、予感に違わず、円筒は割れてくれない。

(これは、見かけ通りの材質じゃない！？)

渾身の一撃が、その檻をぶち破った。

亀裂が入り、筒が割れる。

流れ出る水と共に、教授の身体がこちらに倒れこんでくる。

それを腕で受け止めると、必死に叫んだ。

「教授！」

マナが ほとんど残って無い。

まずい、このままじゃ……………！

「教授！ 教授！」

叫ぶ。

「あ……………ジュー、ド、君？」

「はい！ 教授、今すぐ治療を……………」

「む、ただ。も、どうにも、ならんよ」

「教授!？」

叫ぶ。 だけど 確かに、マナが足りない。

人に流れるマナは、あるいは血に等しいもの。

無くて生きられる、ものでもない。

その意味を理解する。 してしまう。

ああ、目の前の光景と意味を理解している。 でも、こんな結末を理解したくない。

「す……まん。 だま……… ハイベル、スイセ……… す、まん、
ジュー……… だま……… して」

娘の名前。奥さんの名前。そして、僕の名前。

「すまない……………」

掠れる声の、謝罪の言葉。

それだけを、遺して。

ハウス教授は、輝く液体の中に。空気のように、消え去った。

「.....あ？」

無くなった。亡くなった。失くなった。

「あ、ああ.....」

死んだ、死んでしまった。

(え？ どうして？ なんで？ こんなところ？)

ここはイル・ファン。首都で王都。平和な、はず。少なくとも教授にとっては。

ああ、そつだ。一時間前までは、幸せな状態があつたんだ。

偉大な賞の、それを祝つて。

告げて。喜んで。教授も、報われて。僕も、報われるはずで。

でも今は、全部が消えた。

（どうしてなんでこんなありえない今までの努力はなんのためにベルお嬢にはなんとスイセさんにはなんてなんでしんだしんだなくなつたいなくなつたなんでこんなことに逝ってしまった僕を、娘さんを遣して!?)

思考があふれた。山のような言葉が胸の中を暴れる。身体の中のマナも。

亀裂の入る音がする。度を過ぎた肉体強化に、筋肉が軋む。

だけど痛みを感じない。その余裕さえ、無い。痛いのは理解しているが、それよりも優先すべきことがあると身体が麻痺しているのだ。

言い表せない感情が決して広くはない心の内を駆け巡り、その度になにかが削れていく。

「なん、で つ!？」

言葉が、痛覚と音に消された。鋭い痛み。何か、小さい石のようなものが米神を打ったらしい。

「侵入者が これで！」

見れば、衛兵だ。さっき殴り飛ばした衛兵が、こちらに向けて細長い円筒状の何かを構えている。

そこから何かが飛び出て、僕の米神を打ったのだろう。

だけど、致命傷には程遠い。全然、足りない。足りない。足りない。

「ああ……………」

三半規管を揺らされたのか、視界が歪む。平衡感覚が掴めない。

だけど、そんなものに関係があるのか？

自問して、否と答えよう。そうして、任せて身を投げた。

この、抑えがたい、黒く視界を染め上げる感情の濁流に。

（衛兵 side）

「な……………！」

撃った。確かに直撃した。まともな人間なら死に至るはずの一撃が、まともあたったのだ。

だけど、少年は。侵入者の少年は、転がるだけですぐに立ち上がった。

そして、こちらの方を見る。

「ひっ……………！？」

いや、見ていない。見てはいない。ただこちらの方に顔を向けているだけで、見てはいない！

そうして、踏み込みは閃光のようだった。だけど、とっさに反応してきた。構え、引き金を引く。直後に、構えた武器の中から高速の鉄の弾が打ち出される。

まずは避けられるはずのない一撃。

だけど、少年はそれを拳で払いのけた《……………》。

ガキンと音がなって、殴り飛ばされた《……………》弾が壁面にめり込む。

有り得ない光景。

驚く前に、俺の意識は散った。

〔衛兵 side out〕

得体のしれない武器。だが、それがどうした。関係もない。

一度受ければ、形状を見れば、その性能を看破するなど容易い。

ならば同じ。拳で当てるのも同じぐらいに簡単なことだ。

打ち出されたものを弾き、そのまま直後に間合いを詰めきる。

そして、“それ”を手で払って横に逸らしながら、その手首をつかみとる。

意識は怒りに凍てついている。まともな思考など夢のまた夢。だけど、身体は技を覚えている。

本能と身体に行動を任せる。

両者が叫ぶのは、即ち敵の撃滅。

呼吸と同じように手馴れた様子で身体が動く。

握った手首を捻りながら足を払い、すれ違いざまに突き上げの肘を上げて、“打ち上げる”。

『巻空旋・改』

本来ならば風の精霊術を応用し、敵を投げ飛ばす術。

だかこれは違う。風が使えない僕なりの工夫をこらした新しい技だ。

打撃と関節技を混合させた投げ技。

そうして、相手の腕が折れた感触が肘に走り。

みぞおちに打った一撃の感触で、消えた衛兵の意識を悟る。

だけど、この技にはまだ続きがある。投げ技の本質は、相手を崩すことだ。

崩した相手に追い打ちをかけるのは戦闘における基本。

当然の如く、投げの後には追い打ちに繋がる技があるのだ。

（ 追牙！ ）

見れば、目前には落ちてきた首筋。衛兵の、敵の無謀な延髄が目の前に見える。

これを回し蹴りで蹴り飛ばせば、人ならばひとたまりもないだろう。まずもって生きてはいられない。

胸を走る黒い衝動に駆られ、一步、踏み出す。

(……………っ!?)

だけど踏み出したと同時に、師匠の声が頭に響いた。

それは、師事する前の決まりごと。約束。そして、僕にとっては絶対に遵守すべき教え。

人を殺せる技。それを学ぶ上で、師匠は言った。

『……………決して、憎しみのままに。そして絶対に、自分の八つ当たりなんかで人を殺すんじゃないよ』

懇願するかのような声だった。それを思い出し、同時に身を支配していた殺意がはじけ飛ぶ。

追撃を受けなかった衛兵が、地面に落ちて倒れ伏した。

「は……………はは」

僕も地面に座り込んだ。とたん、全身が汗を覆う。身の底すらも冷やすかのような、冷たい汗。

今、自分が何をしようとしていたのかを思い出し、身体が震えた。

だけど、混乱が収まるわけもない。一体、この短時間で何があったのか。起きてしまったのだろうか。

思い返すも、わからない。ただ理解できるのは、まだこの胸の内に残るどす黒い欲情。

フラッシュバックする。閃光のように浮かんでは消える光景。

故郷の風景。

子供。

猿のように偉ぶるやつ。

親父。

母さん。

レイア。

そして、ソニア師匠。

思い出したが故に、最悪な気持ちに陥る。湿地で転び、泥の水を飲んでしまった時よりもひどい。

気持ち悪さが全身を犯している。それと同じくして、やり場のない怒りと、失った夢への絶望が胸を締め付けている。

何かに当たりたい気持ちが、思考を独占する。

直後に、自動で閉まっていた入り口のドアが開かれる。

） ああ。良いところだ（

姿を確認する前に駆けた。敵か誰かも分からない内に、戦闘の意志を固める。

ただ、自分が八つ当たりしたいがために。殺しはしない。だけど、この身は今は収まってはくれない。

「っ!？」

驚いた誰かが、こちらに向かって腕をかざしてくる。迎撃の術を放つのか。

それを見ながら。

襲撃者たる僕だけど、素直に思えた。

(……………綺麗だな)

逆行で顔は見えない。

でも先に伸びる指は、まるで白魚のように美しいものだったと。

4話 「現在喪失」 (後書き)

R - 15の境界線がわからない。血が出たらNG？

これ、もしかしたらR - 15かなあ。いや、全然違いますよね？

マジで分かりません。そこらへんの意見があれば、頂けると嬉しいです。

5話 「未来発心」

思考が、加速する。相手を認識するより前に倒せと、本能が叫ぶ。

それに抗わず走る。一步、二歩、先手を取れる状態だけで距離を詰められるように。

ああ、相手が精霊術を使おうとしているが、そんなものは関係ない。彼我との距離はそう遠くなく、このまま走れば詠唱完了までには一撃を与えることができる。

そう思っていたが、突如悪寒が背中を走る。

(詠唱を、して、いない?)

霊力野にマナが奔っているのが分かる。だけど、詠唱の音が聞こえない。

それは一体、何故なのか。

「　　っ！」

だけど、考える前に跳躍することを選択した。

走る勢いそのままに、斜め前へと高く跳躍する。そして、それは正しかった。

「ウインドカッター！」

翻った腕と同時に、風の刃が先ほどまで居た場所を薙ぐ。切れ味は鋭く、そのマナの量は見たことがないほどに膨大だ。

なにより、詠唱を必要としない術とは何なのか。ナディアでさえ、あの規模で精霊術を使うためには、多少の詠唱を必要とするというのに。

あいつのフレイムドリルとも違う、剣に纏わせたわけでもない。真正銘の、無詠唱精霊術。

(長引かせるのは、まずいな)

無詠唱で何が出てくるか分からないのなら、多くは避けられまい。

だから、その前に倒す。

そして跳躍する勢いのまま、敵の頭上にある入り口の上にある壁を蹴った。

そのまま、地面に向けて加速する。

飛天翔駆。

本来ならば、飛び上がり、突っ込んだ上で相手を蹴り飛ばす技だ。

それを落下の勢いのまま、こちらを見上げている敵の肩口めがけで放つ。

「チィッ！」

い。 だけど相手は前転して回避した。その反応も動きも、かなり鋭

空振った足で着地。衝撃が走るが、マナで強化しているのでどうと
いうこともない。

だから、一步前に。前転で逃れた相手に、踏み込んだ。

相手の意図も同じ。着地の隙を突こうとしたのだらう、剣を振り上
げ、踏み込んでくる。

「はっ！」

振られた剣は 　　ただ、速かった。

だけど速いだけ。技術も何もない、速度を重視した振り下ろし。

こちらの拳は届かない間合いだが、ただ防御するのも芸がない。

迎撃を選択する。マナをこめた右の拳で、相手の剣を受け止めるた

めに。

軌跡を見切り、拳を振る。得物が互いの中央で交差し、こちらの拳と相手の剣が交した。

勢いはほぼ同等。共に弾かれ、一步後退する。

だけど、それでは終わらない。体勢を整えるのはこちらの方が速い。

(?)

違和感がある。コレほどの使い手なら、もっと剣技や体捌きのスキルは上のはずだ。なのに

(あとで考えるか)

今は何しろ殴りたい。このやりどころのない怒りを、ぶちまけたい。

だから一步前へステップで踏み込むと同時に。また、正面から切りかかってきた渾身のマナをこめて掌打。

「っ!？」

相手の驚く声が聞こえる。それもそうだろう。なにせ、打ち出した剣が衝突した瞬間、横に滑らされたのだから。

やったことは簡単だ。マナで固めた掌で受け止め、そのベクトルを横に向けた。

そのまま剣を流され、相手はバランスを崩す。空振りに等しい勢いで、相手の重心の崩れる。

同時に、一步前に出て掌底の一撃を胸元に突き出す。

だけど、そこに姿は無かった。

「ハッ！」

右側面から、声。混乱する思考を抑えつけ、声のした方向へと腕を突き出す。

同時に、交差した防御の腕に衝撃が走るのを感じた

(逸らされると同時、横に飛んでいたのか！)

あのままではやられると見て、咄嗟に横へと飛んだのだろう。

大した反射神経だ。技術は熟達していなくても、反射神経は常軌を逸している。

まるで大気をそのまま感じ取っているかのよう。

そんなことを考えている俺に、剣を振り下ろしてくる。

だけど、速いだけの一撃に当たってやる謂れはない。マナで固めた両腕を交差して、正面から受け止める。

そのまま。間近で、相手の正体を確認する。

(女！？)

ああ、確かにそうだ気合の声は女の声だった。

そして、目の前に見える体躯。つーか胸でけー！。

それに、さきほどの指もそうだ。白い、汚れない手。

しかし、女なのになんだこの馬鹿力は。

(このままじゃ押し切られる)

それを待つ馬鹿ではない。考えるのと行動は同じ。まずは、押されるままに、下へとしゃがみこむ。

「なっ!？」

押していたところを引かれた相手の、バランスが崩れたのを確認。

自分の重心位置と同じ高さならともかく、下に剣を引っ張られればその分バランスは崩れるのは必然だ。

その隙をついて、足払いを一撃。

劣化・転泡。

本来ならば、水の精霊術を応用した一撃。だけど無い今は、ただの足払いにすぎない。

だけど崩した上での一撃ならば十分にすぎる。しかし、手応えは返ってこず。

相手がいないのだから仕方がない。また尋常ならざる反射神経でバツクステップ、こちらの足払いを回避したのだ。

(勘もいい！な)

不意をついているはずだけど、その尽くが外れる。おそらくは、戦闘経験が豊富なんだろう。

と、考えているところに手が突き出された。

赤い炎がみるみる内に広がっていく。

「フレアボム！」

「うあっ!?!」

そして、紅蓮が集うと同時に大気もろとも爆裂した。

ガードが間に合わず、後ろへと吹き飛ばされる。

（ 来る!?! ）

マナの増幅を確認した。

「穿て、旋風」

詠唱する声も聞こえる。

開いた距離と、こっちの足払いによる硬直時間。体勢の立て直しの時間差を利用して”決め”の詠唱術を叩きこむつもりだろう。

そのマナの量は凄まじく、これを受ければひとたまりもない。

(だけど、それは悪手だろ！)

距離は離れている

だが、それがどうした。

気付かれないように内申でほくそ笑む。指摘してやる義理もない。ただ一歩踏み込み、拳にこめたマナを前へと放つ。

「魔神拳！」

「なっ?!」

拳術においては、基本も基本の遠距離技。それはただ、拳に溜めたマナを前方に放つというもの。

だけど、遠距離攻撃はいつだって重要だ。知らない相手こそ、不意をつける。

変わらず、虚をつかれたで相手に魔神剣が直撃。

霊力野にマナを割いていたのか、防護のマナが薄い。威力に押され、相手が仰け反った。

（ チャンス！ ）

この隙を逃す手などない。後ろ足を渾身に踏み出した。超低空での、前方への跳躍。そのまま着地すると同時に踏ん張った。

足元にある液体が滑る。そのまま床と足の底の摩擦係数はほぼゼロとなった。

しかして前へ踏み出したベクトルは消えず、僕は”踏ん張ったまま前へと進む”という奇妙な体勢になる。

だけど、これがいい。

(これなら距離を詰めたまま、マナの防御を^{マジックガード}発動できる)

例えさきほどのような、無詠唱の精霊術　　魔技と呼ばぶつか。
それを撃たれても、ガードで防げる。

そうして、距離を詰めた後に一気に決める。だからここで、例えばどんな攻撃が来ようとも防いだ上で反撃を決めてくれる。

だけど、その考えは甘かった。

「イ、フリートオツ！」

ガードなど関係ないとばかりに。

炎の人のようなものから放たれた暴虐の炎熱波が、目の前を覆いつくした。

「????? side」

今日、3度目のイフリートの一撃。燃え盛る火炎が、衛兵だろう相手の身体を包んでいく。

(……………手強かった、な)

剣を下ろし、ひとりごちる。ここは何と云うところ魔境か。

まず、一人目。隣の部屋に居た女も強かった。かなりのマナを使われ、最後の一撃には手傷を負わされた

この二人目はそれすらも上回っているが。

このような強者を二人も警備に回しているとは。ここは、それほど重要なものを隠しているのだろう。

実際に 国の研究所で、というのは初めてだ。黒匣ジンがこんなところで開発されているとは、今までにない。

ウンディーネの助言に従い、万が一を考えて裏から潜入を行ったの

は正しかったということか。

いつものように正面突破をしていけば、無駄にマナを消費する戦闘を続けた後ならば、もしかすればマナが尽きて四大を使役することが出来ずにやられていたかもしれない。

特に目の前の少年は異様にすぎる。敵意なき戦意と言えはいいのだろうか。だけど純粋な戦闘能力で言えば今までに戦った誰よりも上だ。

殺気は無かったが、見せつけられたマナの黒さは、人にとっては珍しい程に深かった。

体術も十二分に練られていた。身体能力強化はあるが、それに頼りきらない技術。剣技ではない、道具も使わない相手がこれ程に厄介だったとは。

全身を駆使して打倒すべく襲い来る者。道具で補う”あの組織”とは全く違う方向性だ。いや、人間とは面白いものだとつくづくに思われる。

(しかし、危なかったな)

奇襲からの一連の動きは今までに見たことがない程に鋭かった。

随所で見せつけられた技術は、心底肝を冷やさせられたものだ。

(だけど、これで……………!?)

終わった、と。あの一撃を受けて、耐え切った者などいないがゆえに。思い込んだ心を、修正するしかない事態を目の当たりにした。

剣を握り直し、勝ったつもりになっていた心を叩く。そして再び気持ちを引き締め直した。

何故ならば。

「い、ふりーと？ え、なに、四大精霊……………え、偽物？ でもこの威力は……………って熱い!!!」

少年は、口に巻かれていたハンカチが燃えただけ。大きなダメージ

もなく、依然にかわりなくそこに立っているのだから。

「????」 side out

急激に頭が冷えた。

イフリート。炎を司る大精霊。20年前にいなくなったとされる、
四大の一。

（おーけー、まずは落ち着こう）

下に投げたハンカチ、燃えている部分を踏みつけて消す。

そして、目の前の人物を改めて見る。

（ 違うな ）

衛兵の類じゃない。

目の前の女の瞳は、僕にも分かるぐらいに 澄み切っている。

間違えても、こんな研究に協力するような人物じゃあない。

と、そこで思いついたままに質問する。

「アンタも、侵入者か？」

「……………も？ どういうことだ、お前はここを守る兵士ではないのか」

「違う」

とは言っても、一概には信じられないのだろう。油断せず、剣を構えなおした。

「どう言えばいいか……………」

取り敢えず両手を上げて降参の意志を示す。

頭が冷えた。否、急速冷凍された今は、無闇矢鱈に拳を振る
いたくはない。

敵でない女性を殴るのは、趣味じゃないからだ。

でも、相手はやる気満々だ。それもそうだろう。いきなり殴りか
られたのだから。

途中にいきなり“違う”と言われても、納得はできない。

「……一応聞いておく。お前は侵入者じゃないのか？ ならば、何
故こんなところに居る」

「教授を助けに。でも」

と、割れたガラスケースのようなものを見ながら、言う。

「来るのが遅かった。溶けちゃったよ、全部。身体ごと持ってい
れちゃった」

思い返す度に、得体のしれない感情が沸き上がってくる。

悲しみが、あるいはもっと別のものか。

そうしていると、女性は剣を下ろした。

（ え、もう？ ）

まさか、今だけのやり取りで信じてくれるとは。

と、その時の僕は間抜けな顔をしていたのだろう。女性はため息をつきながら言う。

「……………嘘は言っていないと判断した。その教授とやらも、気の毒だったな」

何というか、凜とした声。同情ではないことに感謝した。

「それで、これからどうする？ もう目的は果たせないだろう。出口ならば、この先に良い抜け穴があるが」

「僕もそこから来た。というか、街灯樹消したり、水の上に足場を作ってたのはアンタだよな？」

俺の問いに、女性は頷いた。

「そうか………なら一緒に行かないか」

「一緒に、だと？」

「ああ。教授をこんなにした、この研究の目的を知りたい」

思い出しただけで頭が痛くなる。それに、奥さんと娘さんに一体何
と言えばいいのか。

少なからず面識のある女性だ。悲しみに歪むであろう顔を幻視する
と気が滅入る。

だから、せめて詳細を。話せない内容かもしれないが、このまま逃
げることはいかない。

また別の意図があることも確かだけど。

「それで、知った上でどうする？ 有用ならば利用するのか」

「いや、ぶっ壊す」

即答する。

と、女性は目をきよとんとさせた。

(つーか美人だな、おい)

落ち着いて見てみる。で、結論。

(何この人パネエ)

アグレッシブな髪型をしているけど、それは彼女の魅力を損ねるものではない。むしろ何か似合ってる。

つーかスタイルがパネエっす。レイアやナディアとは明らかに違う、実に豊かな山麓をお持ちで。

「ぶしつけな視線を感じるが……おいておこう。それより、何故壊すことを選ぶ？」

「趣味じゃねーから。あと、これでも医者 endpoint くれなんで」

人を傷つける研究なら、それを無くするのが医師たる者の役割。

とくべつ今更、正義感を振りかざす気はない。だけど、それでも人体実験で無差別に殺すという行為は認められない。

「趣味じゃない、か」

「嘘じゃないよ？ ぶっ壊す。踏んづけて踏みにじって、開発者までぶっ飛ばす」

「疑ってはいない。だが………君は面白いな」

「アンタみたいな人に言われるとはね」

四大を使役するこんなけつたいな美人に、苦笑まじりで変な人呼ばわりされるってどーよ。

(まあ、全てが“本音”ってことでもないけど)

意図はある。仇をうつこと。そして、僕の夢を　　ぶっ潰してくれたこと。

殺しても飽きたらない。でも、他に道が見えたのでその憎悪は保留する。

でも、まあ、この場においては。

まずは　　証拠を示せと言われる前に、示してみるのが最善。

(都合よく、衛兵さんもやってきたことだし)

足音が部屋の中に来る前に、左手で顔を隠す。

片手が不自由になるが、この程度のレベルならばそれすらハンデにならん。

「いつちよ強行突破と行きますかね」

「そつすることにしよう。それで、君の名前は？」

私は、

「ミラ・マクスウェル」

剣を入り口の方に構えた女性。ミラが、横目で名前を聞いてくる。

同じく、こっちも構えながら横目で視線を受け止め、答える。

「ジュード・マティス。でも、ここ脱出するまでは呼ばないで

「

そこで思考が止まった。

え、なに。ミラって良い名前ですね、って違う!!

「マクスウエル!？」

「声大きい! それより、来るぞ少年!」

見れば、衛兵の団体さんが部屋の中へと押しかけてくる。

対する僕達は、一步前に出て応戦を始めた。

思えば、この時は露程にも予想していなかった。

この奇妙で猪突猛進なお姫様と。この先長きに渡るあいだ、共闘することになるとは。

5話 「未来発心」(後書き)

題名候補のひとつ。ポツネタ。ある意味NG的な？

エクシリアというタイトル名は、天文学的な数を意味する英語、「zillion」より多く、という意味と。交差する、という意味をこめて「xillion」(エクシリオン)で、エクシリアになったという。

では、それが例えば「million」だったらどうか。

テイルズオブミリオネア？

ローエン「ファイナルアンサー？」

ジュード「ファイナルアンサー！」

ローエン「……………」

ジュード「……………」

ローエン「……………」

「ジュード」……………っ

ローエン「……………グランドフィナーレ!」

ジュード「ぐああああ!」

ローエン「金は命より重い……………ゆえに、失敗は死と心得るがよいでしょう!」

以上。勢いで。金の重みを知るRPG。

つつーかこの爺さんって無職歴が長すぎね?

使用人になるまで、かなり時間が空いていたような気が。

昔は金に苦勞してそう。年金も無いだろうし。

6話 「賢者の槍」

取り敢えず狭い部屋を強引に脱出。途中で相手の仮面をはぎ取り、装着。

これで正体不明のアンノウンに変身完了。我が名は不審者Aなり。

そのまま1階へと降りると、増援とかち合った。数は30程度。

迂回した衛兵が後ろから来たせいで、はさみうちになる。それほど広くない通路で囲まれてしまった。

けど、そんなの関係ねえ。

数で潰そうとしているようだけど ゼロに何をかけてもゼロだ。

だけど、後ろから小突かれるのは鬱陶しい。

後ろを向きながら、僕は提案する。

「僕は後ろの方を」

「ふむ、私は前ということだな。ああ、後ろから襲ってはくれるなよっ。」

「そつちこそ。それより、まさか　ひとりじゃ無理なんて言わないよな?」

「問題ない。君の方こそ、ひとりで大丈夫なのか?」

「こんなの物の数じゃない」

アナタ程の手練ならまだしも、この程度の的など脅威ですらない。

ああ、これは誤字じゃない。正しく、ま的だ。

「貴様らあ!」

「侵入者風情が侮ってくれたな!」

「ワン!」

一般衛兵プラス雑魚魔獣さんが怒ってる。

けど、何でだろう。

(本当のことを言っているのに怒るとは、人間がなつとらんですよ)

この犬も犬で、それなりの速度持ってんだから機先を制するべきだろつに。

彼我の力量差を全く把握できていないのか、まったく。

そんなことを言っているから ころくなる。

「な!？」

前へ、ステップ2つで一気に間合いへと踏み込む。予想外の行動だったのか、馬鹿の動きが止まった。

「獅子戦吼!」

まず僕の獅子が飛ぶ。吹き飛ばされた前衛の衛士が、後方の衛士を巻き込んで吹き飛んでいった。

「ウンディーネ!」

後方で、激流が飛んだ。後ろも同様の惨状が広がっている。

(ってこのマクスウェル子さん遠慮が無いっす)

互いの持ち技確認しあう暇がなかったから、何使えるか分からないけど……この人マジで四大を操れんな。

さすがはマクスウェルってこのなのか？

考えながらも取り敢えずは目の前の雑魚を殴って蹴って投げる。

「グボオウア!？」

「一撃!？」

「ちょ、はや」

「どろしろってんだ　　?！」

「ウボア！」

「応援を、応援を　　！」

「やめて　　！」

「キャイン！」

軟弱な衛兵と魔獣が仲良く悲鳴を上げて気絶していく。

殺しはしない。でも、手加減なんかしない。まとめて地面を舐めてもらう。

ここでどのような研究が行われてて、自分たちが何を守っていたのか。知らないと言われても、納得できるはずもない。

さっき発散できずに溜まった憎悪。あんたらで、晴らせせてもらう。

「っ、遠くからの精霊術なら　　「魔神拳！」っ、いやあ!？」

拳から発したマナの塊で、前衛もろとも術師を吹き飛ばす。その程度の精霊術なら当たってもそれほど痛くないし、

意味はないんだけど　　ムカつくから優先して叩く。

と、背後にまた強大なマナを感知。

「シルフ！」

風の塊が”障害物”をなぎ倒していく。

というか、マナが大きすぎるから、そっちの方に驚いてしまう。

(四大を統括する精霊にして偉大なる大精霊、マクスウェル様か)

実際に眼で見る前なら、一笑に付していただろう。でも、あのマナと四大を使役する姿を見せられたら、納得せざるをえない。

(それにあの傍若無人っぷりも。あんなに容赦なく人を薙ぎ倒せるような女性なんて、他に知らな……あれ、結構いるね?)

取り合えず3人の顔が浮かび上がった。それが誰かは、あえて言うまい。

(って、なんだ。女性ってそういうものだよな)

別のベクトルだけど、理不尽の塊だよな。

女性(笑) ってつきそうだよな。 師匠以外は。

「……………いま、なにか不愉快なものを感じたのだが？」

前方的的を全て倒したのだろう。振り返って、そんなこと言うてくるミラ女史様。

そういう妙な所で勘に鋭いのもマクスウェル様の特権か……………いや、師匠もレイアもそうだったな。 ナディアも。

「つまりは普通の女性 っつと、これでラスト！」

お茶をにごした返事をしながら、最後の的を殴り倒す。

腹を打たれた最後の衛兵は、打たれた箇所を抑えながら地面へと倒れこむ。

「うし、これで取り敢えずは状況クリア。あとは研究所の奥まで前進あるのみだね」

「……………そうだな。いや、戦闘せずに済んで良かったよ」

お互いにね。力量差はほとんどないから、どう考えても手加減抜き
の殺し合いになってたし。

「取り敢えずは増援が来た方に進みますか」

増援倒した奥のドア。開くと、またおかわりの増援の一団が襲ってきた。

でも特別強い個体がいるわけでもなし、さっきと同じようにボコにして適当に片していく。

「で、はいしゅーりよー」

「……………分かってはいたが、君は本当に容赦ないな」

「ノームでなぎ倒すマクスウェルさんには言われたくないねー」

「固まっている団体を鋭い回し蹴りでなぎ倒す君にも言われたくはないが？」

「俺はあくまで常識的。ていうか、本当にマクスウェル？ いや、あれ見せられたから納得せざるをえないんだけど」

「私はマクスウェルだ。それよりも、君は……………何故、精霊術を使わない？」

あー。

やっぱ、そう来ますか。

「非力な人間の身でも、君は上位の部類に立つほどの腕だろう。そ

れほどの腕を持つ人間なら、戦闘に精霊術を戦闘に盛り込んでいる
と思ったのだが？」

「……………それは、まあ」

って……………正直に、答えてもなあ。

まず、信じないだろう。なにせ相手は4大の上位。嘘を言っている
と思われるのがオチだ。

というより、初対面の相手に誰であろうが、『私は精霊術を使えま
せん』なんて言いたくない。

それに、相手はこっちを完全に信用してない。変な事を言えば、怪
しまれるかもしれない。ここでまたガチの殺し合いはごめんである。

(精霊術のこと、使えないこと……………その原因に心当たりがないか
を、大精霊に聞きたいんだけど)

この場でいきなり聞けるようなことでもない。さっきのやり取りと
今のこの距離を見て分かるように、マクスウェル子さんはこっちを
まだ疑っている。

それはまあ、当たり前なんだけど。でも、だからこそこの場でうか
つな事は言えない。逃げられたりしても困る。

これを逃せば、ひよっとすれば二度と会えないかもしれないのだから。なんせマクスウェルが人間の形を取っているなんて、はじめて聞いたし、見た。

きつと普段は存在しないとか、未踏の秘境に閉じこもっているのに違いない。ここは慎重にならねば。落ち着いてからでも遅くはない。もしかすれば偽物かもしれない。天才精霊術師とかで、4大をそれぞれ召喚できる人間であるかもしれないし。

「ふむ、どうした？」

だから、差し障りない範囲で言い訳するのが吉か。

「精霊術は苦手なんだよ。それよりも相手を殴る方が上手だから」

「殴る方が……それは、なんとなく君らしいな」

「……ノーコメントで」

納得はええな、おい。まー誤魔化せたからいいか。

「では医療術を使えないのも」

「……あー、あー、聞こえないー」

なんとか。なんとか、踏みとどまる。知らないから聞いてるだけだろうし、あくそム力つくけど。

ム力つくけど、我慢する。だってそれは当然のことなんだから。医学生でも、医の道を志すものが医療術を使える、なんて当たり前のことなんだ。

……いや、話題を変えよう。このまま行くとまた戦わなければならぬ事態になるような気がする。具体的には喧嘩売ってしまいう。

「えーっと。それよりさっきのカードキーなんだけど」

唐突に「使い方は分かるか」とか聞いてきたけど、マクスウェル特製の万能鍵とかあるのだろうか。

聞いてみると、マクスウェルさんは首を横に振った。

「そんなものはないさ。これは、君と戦う前にやり合った手練の衛兵が持っていたものでな。戦った時に落としていたので、拝借した。火の精霊術に卓越したやつだったよ。女にしては口が悪かったのが印象的だったな」

「えっと……もしかして銀髪？ ソバカス？」

「その通りだが、もしかして知り合いなのか？」

ちよっと警戒の意志を感じる。ので、断言した。

「あいつは敵です、誰よりも。で、殺したと言わないよね」

「……………最後には撃ち合いになってな。あちらはイフリートを受けとめたようだが、威力は殺せなかったようだ。そのまま出口から吹っ飛んでいったよ。『ぶっ殺す、必ずだ！』とは叫んでいたから、死んではいないだろうが」

「あー」

うあ、かなり物騒だな。でもあの貧乳らしいというかなんというか。

(それより、やっぱりここに居やがったか)

何を企んでやがるのか。

で、そんな事を考えているとマクスウエルさんが念押しに聞いてくる。

「本当に、友人ではないのだな？」

「むしろ宿敵かなあ」

譲るものなど一つもない、正真正銘の敵。そう説明すると、マクスウエルさんはそうかとだけ返してきた。

興味ないといった感じだ。冷たいというよりは、超然とした。それでいて何処か歪なものを感じるのは、彼女が人の形をしているからか。

って、今は考えている場合じゃない。

（それより、リアルオーブを使いこなせてないなあ）

見る限り、リアルオーブの補助は満足に得られていないようだ。オーブの発行が薄い。それでもこの速さってのは恐ろしいけど。

でも、剣術に関しては完ぺき素人だな。剣速は速い、間合いも理解できているけど、ただそれだけ。

剣筋に工夫が見られない。切り返しの時の腕と手首の使い方を見ていれば分かる。あれは腕力にものを言わせた剣そのものだ。

それでも生き残れたのは………圧倒的な身体能力と精霊の補助、あとは戦闘経験のおかげか。自分より圧倒的に強い相手と戦ってきたことはないを見た。

それに、メインとしていたのは恐らく精霊術。あの威力を見れば、納得もできるけど。

「ふむ、恐らくここだな」

ようやく、到着らしい。何やら難しい顔で、左の通路にあるドアを睨んでいる。

「えっと、この先が？」

「目的地だ。あれの気配がする」

言つと、警戒も無しにマクスウェルはドアを開いた。

「……………でけえ」

最初に抱いた感想はそれだった。入り口からかかる橋の先にある、広大な空間の中央に座する台座。

その上にあつて。その場所を支配するように、”それ”は鎮座していた。

「やはりか……………黒匣^{ツツ}の兵器」

「ん？」

何事かつぶやいたようだが、聞こえなかった。

だけど、その声質は分かる。

この声は、敵に対する者に向けるものだ。

ともあれ、調べてみるに限る。壊すのはその後だ。

もしかすれば、ハウス教授が戻ってくるかもしれない。

そう思ってこの大掛かりな装置らしきものを操作するパネルをいじっていると、名前が出てきた。

「クルスニク賢者の槍……………」？

クルスニク。確か、創世記の賢者の名前だ。

「つてえ！？」

ふと、背後に強大なマナを感じた。

振り返れば、マクスウェルが精霊術を使うための方陣を組んでいる。

「何を！？」

「クルスニクを冠するとは

これが、人の皮肉と言うものか」

声には怒りがこめられていた。

激昂ではない。静かな憤怒が、彼女の声の底と瞳の奥で燃え盛っている。

「やるぞ！ 人と精霊に害為すこれを、破壊する！」

「っ、四大を全部、まとめて召喚!？」

イフリート、ウンディーネ、シルフにノーム。

具現化できるほどに集められた、4代の系統の長。それぞれが、命じられるままに、破壊すると宣言した槍の周囲に展開していく。

「マクスウエル……!!！」

ここに、確信を得た。

これほどの規模、これだけのマナを制御しきるとは、ただの人間では有り得ない。

「はあああああっ！」

四方に展開した四大。それを四半点として、宙空に円の方陣が組み立てられる。

円の中央には、わずかに紫。かつ強大な、見たことのない程のマナの塊が集中していく。

だが。

「許さない……………つっぴいんだよー!」

聞き覚えのある声が、装置の所から。

「ナディアア!？」

「っ、ジュード!?　なんでテメエがここに……!!」

驚いているようだ。視線をこっちと、精霊術を行使しようとしているミラとを、交互に行き交う。

次の瞬間、その顔は火山のように赤く、怒りを持つそれに変わった。

「お前らまとめて死んじまえ!!」

「何を!？」

止める暇もない。何故か狂うかのように顔を歪めたナディアは、装置のすぐ横にある、操作パネルをいじりだした。

まもなくして、槍のような巨大な兵器の先端が開いた。光が溢れ、その槍のような先端の前に、フラスコを十字に組み立てたようなものが出てきて。

直後に、展開していた方陣を“マナごと吸い込んでいく”。

「マナが……吸われる!？」

「これは……!？」

こっちの体からも、マナが吸い込まれていく。

全身から、何か大切なものがどんどんと無くなっていく。

「^{ゲート}靈力野に作用して……」

言おうとして止める。そんなはずがない。

もし、そうならば。

靈力野^{ゲイト}が無い僕から、マナを吸えるはずがない。

「バカ者、正気か!? お前もただでは済まないぞ!」

隣からは、マクスウエルの叫ぶ声がする。

そうだ。こんな距離にいて、あいつも巻き込まれないはずがない。

四大も封じ込める、こんな馬鹿げた性能を持つ規格外の兵器だ。ひとりだけ無効化なんて、できるはずもない。

(…………いや、ちょっと待て)

「アハ、アハハハ! みんな、まとめて死んじまえ!」

狂った笑い声。いや、それはいい。こいつは時たまこっとういう笑いを
する。

(だけど、ちょっと、待ちやがれよ)

こいつ、マナのことを知ってやがる。装置のことも。

この女^{ママ}ア、もしかして……………！

「く、マナの使い過ぎか……………このままでは……………！」

膝をつくマクスウエル。だけど、そんなの知ったこっちゃんえ。

俺は、聞きたい事を叫んだ。

「ナディアアアアアアアツツ！！！」

「はっ、なんだい糞野郎！」

殺気を、乗せられるだけ声に載せて。偽ることは許さないと、問う。

「ハウス教授を殺つたの、テメエかあ!？」

「ツツ!？」

見られたのは、驚いた顔。

「っ判断つかねえ……………どっちにせよ、これ止めてからだ!！」

どうやれば止まるのか。考え、正面を見ればマクスウェルがよろけながら前へと、装置に向かって歩を進めている。

(あれか!)

装置の鍵のようなものが見える。あれをどうにかすれば、装置は止まるかもしれない。

だけど、マクスウェルが膝をついた。

「くっ、こんな……所で！」

マナの使いすぎで、動けなくなったようだ。

それはそうだろう、俺とあいつと連戦して、その上で先ほどのような4大を召喚する馬鹿げた規模の精霊術を使ったのだ。

まだ人間の形を保っているのがさすがのマクスウェルと言った所だけど、さすがにこれ以上の無茶はできないらしい。

こっちも同様だ。

「阿保な兵器作りやがって……!!！」

吸い取られる速度が早過ぎる。体内のマナが制御できないから、体もうまく動かせない。

今から歩いて、あそこまでたどり着くのはかなり危険な賭けになっちまう。

でも、今ならば。

この場所からなら、なんとかなる。

背後までたどり着いた後、短いその名前を叫ぶ。

「ミラ！」

「っ、何だ！」

「足い上げる！」

「何を?! っ、そうか！」

中腰に構えて腕を組む体勢のこちらを見て、やりたいことを理解してくれたのだろう。

なんとか、といった調子で足を上げると、こちらに全体重を載せてきた。

これで、用意はできた。あとは

「いっせーの」

「今だ!！」

跳躍に合わせ、腕を思いっきり持ち上げる。

直後、ミラは宙へと飛んだ。そのまま、パネルの上にある物体をつかむ。

「くっつー!!」

だけど、何かの反発を受けているようで、あと一歩で届かない。

そして、僕の足の下から、光るリングが出てきて、それが体を拘束する。

「くそ……………!!」

体も動かない。見れば、ミラも同じように動きを封じ込められてい

る。

(終われるか、こんな所で……………っ!?)

かくなる上は、命を賭しても。と、考えた時、脳の奥の何かはじけて声が聞こえた。

兵器の音も聞こえない。自分の鼓動の音も聞こえない。

正真正銘の静寂の中、声は言う。

『こ……げ……』

(っー?)

誰だ、と問う前にそいつは言葉を続けた。

『さ……ち……ら……使……』

『あ……子……そばを……離……ど……』

(これは……四大精霊!?)

少年のような声に、トボけた男の声。凜とした男女性の声が聞こえる。

そして最後に、男の声はこう告げた。

『……を……連……逃……ろ!』

直後、四大の周囲から風が生まれた。突風が室内を吹き荒れ、そのまま僕は後ろへとすっ飛ばされ、入り口前にある橋まで転がる。

「四大が!？」

兵器の中へと吸い込まれていく。

直後、ミラはまた立ち上がった。

拘束を力任せに引きちぎり、マナの吸収をもねじ伏せ、パネルの上にある円筒状の“それ”に手を伸ばす。

()

心の中が真っ白になる。辛いはずだ。今にも倒れたいだろう。

なのにマクスウェルは、ミラ。マクスウェルは膝をついたままではない。

賢明に立ち上がって、やがては

「う、あっ!?!」

装置の部品らしき円筒状の何かを、声と共に引きぬいた。同時に、装置が止まる。

しかし直後に、また突風が部屋を蹂躪する。

ミラは完全に油断していたのか、その体を吹き飛ばされ、さきほどの僕と同じように橋の上に倒れる。

「っ、足場が!?!」

二度の突風に、振動。足場は耐え切れなかっただろう。音を立てて橋の継ぎ目が外れていく。

気づいた僕は、とっさに崩れ行く足場を蹴って跳躍し、通路の上まですべて避難する。

ミラも体を起こし、尻餅をついたまま手に精霊術の陣を展開させた。色は緑だ。シルフを呼んでどうにかするつもりだろうと思ったが、
ただ、その陣はすぐに霧散して無くなった。

「っ！？」

そして、驚く暇もない。足場は完全に崩れ、ミラも一緒に落ちていく。

金の髪が、翻って下に落ちていくようにして。

「っ！？」

気づけば、僕は跳躍していた。

「君は、何を………!？」

「手え伸ばせえ!!！」

怒鳴り声に反応したのか、ミラが手を伸ばす。

掴み、引き寄せると同時に、こちらに向かって降ってきていた足場の板材を蹴り飛ばし。

「厄日かちくしょおおおおおおお!!！」

僕とミラは、そのまま下へと落ちていった。

7話 「脱出」

「ぶはっ！」

ミラを抱えて、水から上がる。そのまま、かぶっていた面を取り、抱えていたミラを引き上げる。

ああもう、ただでさえ服が重くてきついつてのに、こいつは！

「げほっ、げほっ……………く、助かったぞ」

礼を言ってくるが、かなり苦しそうだ。

それも仕方ないだろう。まともに水を飲んでたからな。

いや、しかし焦った。川に落ちた直後にまた精霊術を使おうとして、落ちる前と同じに術は発動しなくて。

ミラは、それに驚いたせいか盛大に口から気泡を吐き出したのだ。危うく溺死する所だった。

「ってーより、何で泳げないんだよ精霊の主……………」

まさかあそこまで泳げないとは思ってなかったぞ。

そんなお騒がせな精霊の主は、落ち着いてからこっちを見てぼやく。

「流石に、ウンディーネのようにはいかないものだな」

「いや、当たり前だろ人間なんだから……ん？」

ちよつと待て。考える暇無かったからあれだけど、ミラって人間だよな。

なんで精霊の主様が人間？ 大精霊ってのは、あの四大のようになれぞれの系統の精霊が集まって形をなすものじゃあ。

いやでも人間の精霊ってなんだろう。

悩む俺をよそに、ミラは呼吸を整えられたようだ。

「ふう……助かったぞジュード。いつもはもつと泳げるはずなんだが……」

「いつもはもつと？ ……もしかして、通常はは四大の力を借りて体を動かしているのか」

「あくまで補助だな。水の中でも、空を飛んで移動する時にも四大の力を使っている」

「まじですか」

ていつか、空を自由に飛べんのか。うわ、乗せてもらいたい。

っつーかこの服で飛んだら下からのナイスアングルがパンモロ！

(……………じゃ、なくて)

止まれよ本能。問題はそこじゃない。今考えるべきは、何故四大の力が使えなくなったのかだ。

そつえば突風が吹いた後、あの槍の中に四大が吸い込まれたように見えた。

大きい気配が消えた感じも。と、いうことは　もしかして、あれは目の錯覚じゃなかったのか。

「なあ……………ミラ？」

「……………ああ。四大の力を感じない……………あの装置のせいだろうな」
ミラも見ていたようだ。同意しながら立ち上がると、濡れた髪を横に振る。

いや冷てーな、おい。

「……………ふむ」

ジト目で睨む俺をよそに、彼女はじつと正面を見据えている。視線の先は研究所の方だ。

いや、まさか研究所に再突入はしないとと思うけど……………何やら心配だなこのマクスウェル子さん。

「分かっているとは思うけど……………四大の力が無いと、あの槍は到底壊せそうにないじ」

「それは、そうだな」

返事をしながら、また考えむ。

いや、僕もあの兵器を壊す方法を考えるべきか。まさか地道にどかりどかりと殴って壊すわけにもいかんだろうし。

その前に拳の方がいかれる。

そうして、しばらくした後。ミラは思いついたように顔を上げて、何事かを呟いた。

「あいつらの力、か……………そうだ、ニ・アケリアに戻ればあるいは」

と、納得したように頷くミラ。

すぐさま振り返ると、こちらの目をまっすぐに見てくる。

その目に、落胆の色は毛程にも無かった。

「世話をかけたな、ジュード。手助け、感謝する………それではな
君は家に帰るといい」

「あ、ああ………」

すっぴりな感謝の言葉に、返事をして。

階段を登って、去っていく彼女の背中を見ていた。後ろ姿も綺麗だ
が 考えるべきなのは、そこじゃない。

(………なんだ、この感覚は)

違和感、という程にはつきりとしてもものではない。だけど、今のあ
の瞳は何だ。

かなり大きな失敗をしたというのに 欠片ほどにも、気落ち
した様子が見られない。

(……迷いのない瞳は、綺麗だ。だけど、あれは何か違う)

これは彼女が精霊の主だからか。いや、もっと根本的な所でマクスウエルの”あれ”は違う。

立ち直りが早過ぎるとか、そういうレベルにない。

あの意志の強さには、どこか狂気を感じさせられる。

先ほどの瞳を思い返すと、どこか寒気を感じるような。

そんな時、階段の先から何か声が聞こえた。

「これは、悲鳴？」

階段の上から、女性の悲鳴が。

って、おい。

「ずいぶんと、聞き覚えのある声だったなあ、畜生！」

その方向へ走る。で、階段を登った先にあるのは、研究所前の広場だ。

そこには、ミラと 衛兵がいた。

ミラは剣を、衛兵は長い棒を。互いに武器を構え、戦闘に入っている。

(一対四か)

数にして4倍の兵力を持つ衛兵は、ミラを囲むような陣形を取っている。対するミラは 足を怪我していた。

痛みに顔をしかめながら、足をひきずるようにして、何とかといった調子で応戦している。

(逃がさないように、か)

衛兵の目論見は、恐らくそれだ。どうあっても逃げられないように、まずはミラの機動力を封じたのだろう。上からは捕縛でも命じられているのか。

他に外傷が無い所を見れば、その推測は正しいように思える。

しかし、ミラは何故にそんな一撃を食らったのか。どう見ても研究所の中に居た衛兵と同レベルだ。

まともに食らったとして、そんなにダメージを受けるような強さじゃない。

その疑問の答えは、すぐに分かった。

「はあっ！」

ミラは、足をひきずりながら間合いに入った衛兵に剣を振る。

否。剣に、振り回されていた。

まるでか弱い女性のように、剣の重さに振り回されている。

剣速はお粗末にも程がある。最底辺の傭兵のレベルにも達していない。当然に剣は防がれ、ミラは衛兵の反撃を食らう。

「……………あー、そういうことね」

四大の恩恵は無くなって。

つまりは、これが彼女の素の実力ということだ。

そうしている内にも、また衛兵の数は増えていく。

対するミラは 足音に気付いたのか、こちらをちらりと見た。

整った顔立ち。綺麗な瞳が、まっすぐとこちらを捕らえて。

しかし、直後に視線は逸らされた。

彼女は、先ほどまで共同戦線を組んでいたこちらに、しかし何も言葉を発さず。

おそらくは本格的に巻き込んでしまうことを避けるために、声をかけず。ただ無言で、敵のいる正面に向き直った。

一言も。

弱音も。

助けも、乞わないで。

ただ、自分の力のみで状況を打破せんと、剣を構える。

僕はそれを見て

ため息が出た。

研究所で対峙した時を思い返すに、彼女の戦闘経験はかなりのものだろう。

それゆえに、自分と敵との現時点での実力差も、この絶望的な戦況も理解していると見ていい。

それでも、僕を巻き込まず、ただ一人で戦おうとしている。

その背中が、眩しい程に気高くて。

「あー、うー、もー！」

訳のわからない感情と共に、頭をかきむしる。

「だらっしゅあぁっ!!！」

そして、前へと走った。

「貴様　　なっ!？」

「セイヤっ!!！」

まず、先頭にいる衛士を一撃。腹に拳を叩きこんで、その場に昏倒させる。

「何者」

と、相手側は突然の乱入者に驚き、戸惑っているようだが、なにもかもが遅い。

殴った衛士が倒れるより先に、ワンステップで踏み込み。

二人が固まっている場所、その中間の位置にステップイン。

右の前回し蹴りで一人目を、続く左後回し蹴りで二人目を蹴り倒し。

「魔神拳！」

正面、直線上に居た二人を魔神拳でなぎ倒す。

残すは後方にいる3人のみ。だけど、こいつらに構っている暇はない。

そのまま振り返ると、ミラへと近づく。

「ジュード!？」

「いいから、こっちだ!」

何か言おうとするミラの腕を引っ張る。

「痛っ！」

「くそ、背中に乗れ！」

足の怪我を思い出し、咄嗟に背中を出した。

ミラは一瞬だけ戸惑ったようだが、背中に乗ってくる。

僕はそのままミラを背負い、啞然とする衛兵をその場に残して撤退を開始した。

「ジュード……！」

「名前はやめて欲しいなあ！」

いや、さっき研究所でナディアに叫ばれたからもう無理か。

「君は………いいのか？ このままじゃお尋ね者になるぞ！」

「いいから、全部後だ！ このまま海停から船に乗って、ア・ジユールに脱出する！」

「ごちゃごちゃと背中から聞こえる声を無視する。それに、あいつらは倒すべき敵で教授の仇だ。殴っても何も問題はない。」

だが、一人では流石に如何ともしがたい。ここは脱出すべきだろう。このまま、ラ・シユガル国内に留まるのは、絶対にまずい。

あるいはここ、大都会であるイル・ファンの裏路地に潜伏することも考えた。だが、それは無謀だと考えなおす。

時期に出口となる場所は完全に封鎖されるだろう。ラ・シユガルにある街もだめ。それに、このイル・ファンから陸路でたどりつける街は少なすぎる。

まさかガンダラ要塞や、ファイザバード沼野を抜けるわけにもいかない。

ああ、流石は天然の要害、”輝きし王都イル・ファン”ってか！

愚痴りながらも突っ走り続ける。

間もなく、広場の向こうにある海停の前まで辿りついた。道中、通行人からの視線が痛かったがそんな視線には慣れていく。

「ジュード、あれだ！」

「あれは しめた、イラート海停行きか！」

ア・ジュール所有の船だ。いざ船が出航してしまえば、ラ・シユガルには止められまい。その権限も無い。

このまま、走って飛び乗るか。そう考えた時、目の前に衛兵が立ちふさがった。

情報が速い、もうお尋ね者にされているのか。衛兵は、確信を持って進路に立ちふさがった。

止まれと叫んでいる。だけど、止まれと言われて止まるお尋ね者は居ない。

むしろ加速したまま跳躍し、衛兵たちの頭上を飛び越す。

しかし、相手も考えていたようだ。飛び越した先、予想着地点の周囲には、衛兵の団体さんが展開している。

殺気飛び越した奴らのせいで、見えなかったのだ。見れば、先ほどまでとは1ランク違う衛兵もいる。

「ちいつー！ー！」

宙空で舌打ちをする。一人ならどうとでもなるが、ミラを背負ったままでは無理だ。

だけど、留まる方が危険だ。国も、軍事機密を見た僕達にかける慈悲など無いだろう。捕まれば、ともすれば処刑されかねない。

ならば、いつそ玉砕覚悟で突っ込むか。

そう思った時、横から何か飛んできた。次々に飛んでくるそれは、石のように小さい。

その礫のようなものが、待ち伏せしていた衛兵達に当たる。

「そのまま走れ！」

「っ、分かった！」

飛び込んできた若い男の声。見れば、20過ぎの男がいた。何やら洒落た格好をしている。

かなり胡散臭い風体だが、今は確認している隙がない。考えているよりも行動すべきだと判断し、着地直後に限界まで加速した。

乱入者の攻撃に怯んでいる衛兵達の、その脇を駆け抜ける。

「船が出るぞー！」

「いや、この距離なら！　しっかり掴まってて！」

「つてえ、置いてくなって！」

マナを足に集め、強化。限界まで加速し、乗り場の門をくぐり抜ける。

「待て！」

後ろから衛兵の声が聞こえるが、無視。

「背負ったまま行けるか！？　無理なら代わるぞー！」

「こんな役得、譲るわけにはいかんでしょー！」

非常時にあれだけど、背中感触がごちそうさまです！

「……………役得？」

「よっしゃ口チャックだミラ！　舌を噛むぞー！」

追求を誤魔化し、正面にある木のコンテナに飛び乗る。

その上を走り、更にクレーンに吊るされた木材に飛び乗り、最後に思いつき船に向けて跳躍。

船の甲板の上に着地。

衝撃を膝で殺し、背中のミラへ伝わる衝撃をできる限り少なくする。

でも、衝撃を完全には殺せず、ミラの姿勢が前へと傾いてくる。

(凄まじい弾力でごわす！)

何処か別の世界の電波が飛んできた。

自重。

その隣では、一緒に飛び移った、先程助けた男が着地にミスったらしい。

勢いそのままにコンテナに頭から突っ込んで、もがいていた。

何という芸人。素でこれだけの事をやってのけるとは。

「ビューティフォー」

「いや、助けるよ!」

男のシッコロミンが、出航する船の甲板上に響きわたった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5202x/>

Word of “X” ~ We have no wings ~

2011年10月28日02時07分発行